英国春秋

２０２２年　秋号
ISSUE No.４１
（ 令和　４年）
発行　英国日本人会

はじめに

今年はほおずきの実が沢山なりました。みどりのランタンのような顎に包まれた中の丸い実は、そのうち赤く熟すことでしょう。ぼんやりと眺めているとつい子供の頃を思い出してしまいました。ほおずき、夜店、金魚すくい、綿菓子の甘い香りも、エチレンガスの臭いも一緒にでした。仲間たちが赤い実の中の種を出して、口に含んで鳴らすのを、それが出来ない私は、いつも羨ましい思いで見つめていました。９月に入り、我が家のほおずきは緑の袋がベージュ色に変わり、中の実も同じ色で赤くはならずじまい。触れるとカラカラと乾いた音がして、あのキュ・キュとならす音ではありません。でもそれはそれで風情があり、もしかしたら夏が去っていく足音かもしれません。鬼灯（ほおずき）の　色深くして　夏が逝く

この夏は庭いじりが好きな者には特に大変な、雨不足のため旱魃宣告が出されてしまった年になりました。庭の草木が心配で、以前から計画していた旅行を止めようかと思ったほどです。何しろ BBC のニュースでは、干上がった川の魚を救助している映像や、熱波のために燃えだした草原の映像が余計に私の心配を煽りました。友人・知人間の E メールも、暑い暑いの連発で、“猛暑”と言う言葉が目の中でぐるぐる回るほどでした。
地球温暖化が叫ばれて久しくなりますが、今夏ほどそれが身近に迫っていると感じた年はありません。政府レベルで CO2 フリープランが出されていますが、いま、我々個人が出来る防止策を考えてみました。家庭内の節電、節水、徒歩や自転車、公共交通機関の利用、買物では持参のバッグを使用、肉類より野菜を、そして庭の草木を増やす等々です。これらを考えると、TV の観過ぎと夜更かしが防げ、徒歩で足腰が鍛えられ、庭の草木が出す O2 を吸いながら心も癒されるのですから、地球も人間もともにハッピーこの上なしと言えそうです。

今回、秋号の特集は“戦い”でしたが、それについてのエッセイが何稿か寄せられました。6 カ月前のこの項では、ウクライナ VS ロシアの戦争の短期終結を期待したはずでしたが、今なお続けられています。“人間の歴史は戦いの歴史”なんて、今、戦火を被っているウクライナの人も一部のロシアの人もそんな言葉は聞きたくもないことでしょう。自分達が選んだ政治家が始めた戦争ですが、その政治家だけが“開始・終結”の鍵を握っているのかと思うと、何だか不公平な気がします。ウクライナのゼレンスキー大統領はイギリスの議会へのオンラインスピーチで、「・・・我々は森で、野原で、海岸で、通りで戦う・・・」と昂然と胸をはり大喝采を受けました。このウクライナのチャーチル氏が国民を代表して“戦う”と宣言するのは頼もしい気もしますが、反面、それでは家を焼かれ、愛する人たちを失い、自身も傷つき、将来の望みを失った人々はどうなるのかとつい思ってしまいます。どう考えても理不尽な言い訳と自国民を騙しながらの、他国に侵攻したロシアですが、簡単に「お前が悪い！」決めつけることが出来ないのも問題ですね。アメリカやイギリスを始め多くの国が経済制裁で脅せば、ロシアはガス供給停止や核兵器を使うぞと脅し返します。心情的にはウクライナに勝って欲しいとは思いますが、だからと言ってロシアに戦争を終結せよとは言えないのは前述の理由等あり複雑です。第二次世界大戦のようにこの戦争を、戦勝国・敗戦国と勝敗を決めてしまう終結は無理でしょう。ベトナムやアフガン戦争のように、泥沼化した戦争からロシアが手を引くことも考えられません。また、ドンバス地方やクリミア半島が存在する限り、紛争の種は決して消えてしまわないでしょう。もし、ロシアが有利な条件で戦争終結となれば、世界秩序の崩壊になる恐れがあります。中国が次は我が国とばかり名乗りあげそうです。各国にもそれぞれの思惑があり、この戦争が長引けば自国の民を不幸にしてまで、援助を続行出来るのでしょうか。だからと言ってウクライナを敗戦国に出来ないのも前述の通りです。この戦いが民間人の被害が大きいと言う理由を全面に出せば、ここで一時休戦、そしてその間ありとあらゆる手段で“仲裁案”を全世界の国々が協議して、戦争終結の道を開いて行く…のは楽観過ぎるでしょうか。それと、何とか「国連」の力を強力には出来ないものかとも思っています。

＊＊＊もくじ＊＊＊

はじめに		２
もくじ		３
英国春秋歌壇　舞　蝶	バロー典子	４
オペラは私の常備薬	フォガティー洋子	５～　８
女に生まれた為の戦い	ビドル　惠	８～　９
戦いすんで	古川　隆	１０～１１
カチンコの前にあなたが居たー京マチ子ー	渡邊道英	１２～１３
私の麻雀	早乙女健之	１３～１４
シャンソンとサンソンの不思議な関係	飯塚忠治	１５
北海道の森の妖精	ビドル　惠	１６～１８
猫の死	田村陽子	１９
クララとお日さま - イシグロ・カズオ -	小川のり子	２０～２２
古典籍スクールへ - 寺子屋 -	ブランド啓子	２３～２６
英国春秋俳壇　青胡桃	エリオットつや子	２７
ヘンデルのバロック・オペラ	原田孝雄	２８～２９
散歩道、Dollis Valley Greenwalk レポート 2022 年	須永静江	３０～３２
また付いてますよ	坂　佳樹	３３
ウクライナ戦争と情報戦 - 秘密情報、前例なき暴露 -	片山哲也	３４～３５
「戦争と平和」について	ネット文化サロン（加藤・飯塚・小川）	３６～４１

特別寄稿

片山哲也氏	時事通信社・前ロンドン支局長
原田孝雄氏	元在ロンドン金融会社勤務
フォガティー洋子氏	音楽ジャーナリスト 「肩の凝らないオペラ入門講座」主催

（アイウエオ順）

英国春秋歌壇

バロー典子

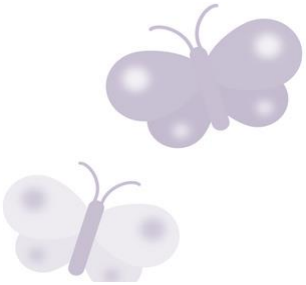
舞　　蝶

時くれば　花咲き散るを　常とする
　　流れる時に　朝の挨拶

はだか木に　みどり点じて　日に増して
　　大きくなるを　見ゆる喜び

さわやかに　風吹く野辺に　立ちて見る
　　一面の黄色　バターカップの海

たわむれて　光の中に　舞う蝶二匹
　　気候変動　無きが如くに



大いなる　目に見えぬ人　草原を
　　渡りし如くに　風なびきたり

青き空　広がるもとに　人と人
　　戦う国の　あるを悲しむ

父の日の　出会いは嬉し　わが子らも
　　父と呼ばれる　年となりおり

退職の　夫（つま）の国なる　英国の
　　自然の中に　憩う仕合わせ

アイパットの　漫画に見入る　幼な子の
　　手つきの先の　未来の世界

"天寿"とう　言葉に思う　安らぎは
　　母なる大地に　抱かれる思い

"クィーン逝く"　ニュースに触れし　人々の
　　悲しみ広がる　国の内外

ユーモアは　パディントンベアと　ティをする
　　クィーンの姿　子らに残して

オペラは私の常備薬

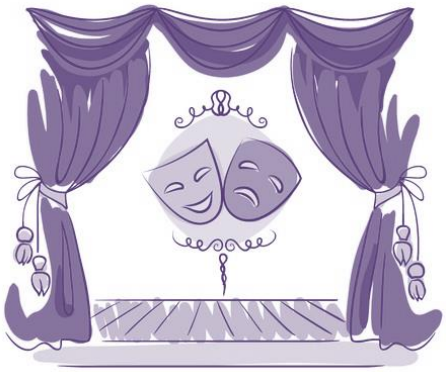
フォガティー洋子

半世紀近くも前のことだが、私は語学学校に通いながら AP 通信社ビル内の S 新聞社でアルバイトをしていた。ヨーロッパ総局長の W さんとロンドン特派員の A さんはお二人とも音楽好きでよくコンサートやオペラに通われていた。昼休みには私も仲間に加わってしばしば音楽談義に花が咲いた。

まだ日の浅いロンドン生活だったが、噂に聞くロイヤル・オペラハウスとはいかなるものか、最も安い 2 ポンドのチケットを手に実地検分に出かけてみた。

華やかな雰囲気の正面玄関から入ろうとしたが、丁寧に断られ、脇通りに入り口があることを教えられた。そこは同じオペラハウスの入り口だとは信じられないほど陰気なアンフィシアター（天井桟敷）専用の入り口があった。目の前にはコンクリートがむき出しになった階段が不愛想な顔で迎えてくれた。周りの人たちとはご来光を拝むために登山口に並んだ気分でお互いの顔を見合わせたものである。そこで偶然出会ったのは顔見知りの AP 通信社のジムだった。シャツのボタンが辛うじてとまっている、良く言えば恰幅の良い初老の陽気なおじさんで、天井桟敷の常連客だった。二人でフーフー言いながら 100 段近くを上っていくとやっとアンフィシアターにたどりつく。ジムは英語もよくわからない私にオペラの手ほどきをしてくれた。当時は字幕などという親切なものはなく、台詞は勝手に想像した。「リゴレット」を観た時はアリア「ラ・ドンナ・モビレ」を聴きながら「風の中の～～羽根のように～～」と有名な日本語の訳が頭の中で響いていた。

アンフィシアターに限って言えば、「オペラハウス＝豪華」と言った方式は全く成り立たたない。正面入り口にはトップハットに金モールのついた真紅の制服の堂々たるドアマンが立っていた。天井桟敷入り口とは何たる格差よと憤慨したものだ。



客席は馬蹄形をしている。劇場によって呼び方は違うが、ロイヤル・オペラハウスでは一階席はストール、二階席はストール・サークル、三階席はドレス・サークル、四階席はバルコニー、そして歌舞伎座で言うなら「大向こう」にあたるアンフィシアター（天井桟敷）が最上階である。舞台に対して向かい合わせになる席は急角度で後方はほぼ天井に近い。高所恐怖症の人にはとてもお勧めできない。舞台に対して直角になる席はスリップと呼ばれる。座席は申し訳程度のクッションが着いたベンチである。舞台を見るには斜めを向いて座らなければならないという翌日の筋肉痛が保証される席である。一番安い席だが、音響は最高。舞台てっぺん近くの席になると舞台はほとんど見えなくなる。その代り真下に陣取る指揮者以下楽員たちが手に取るように良く見える。アンフィシアターの別名はゴッズ（神の複数形）である。ジムのような常連が多く彼らの知識や批評は並みの評論家より的確で最も厳しい評論家である。

歌手達から最も恐れられているのがミラノ・スカラ座のゴッズたちだ。かのパヴァロッティにもほんの一瞬声がかすれたといって盛大なブーイングを浴びせたものである。「ブー　!!」、「ブー　!!」と叫んで不満の意を表す。というかやじり倒すのである。

現代トップテノール歌手の一人ロベルト・アラーニャが「アイーダ」で開幕早々に歌われるアリアでゴッズから盛大にブーが飛んだ。怒ったアラーニャはその場で舞台を去ってしまったのである。幸いにも代役歌手が控えていたが、この歌手は衣装をつけるヒマもなく普段着のままでエジプトの将軍役を歌うことになってしまった（この時の様子は YouTube で見ることができる (238) Alagna Scala 2006 - YouTube）。

ロイヤル・オペラのゴッズはスカラ座に比べるとまだ上品なもの。歌手に対しては少々出来が悪くて

もやじり倒すことはないが、演出家に対しては情け容赦がない。

ドミンゴと筆者

ドミンゴがロイヤル・オペラにデビューしたのは 1971 年のことだ。瞬く間にスターとなった。2 ポンドのスリップ席からはドミンゴの容姿は見え隠れしたが、張りのあるつややかなテノールはこれが人間の声だとは信じられないほどの迫力で私を虜にした。ドミンゴの出演する日はゴッズの熱気も一段と上がった。ドミンゴが「ラ・ボエーム」の主人公ロドルフォを歌い終わって舞台の一番前まで出てきた時には両サイドのスリップ席から水仙がドミンゴをめがけて雨あられのように降り注いだ。水仙をつかんでスリップ席を見上げたドミンゴの満面の笑みは忘れられない。

今ではあの魔の階段は使われなくなった。
観客は全て四民平等。正面玄関から胸を張って入ることができるようになった。金モールのドアマンはいなくなったが。

100 段階段の代わりにエスカレーターでスィッと一気にアンフィシアターに到着。お洒落なカフェからはかって「マイ・フェア・レディ」でオードリー・ヘップバーンが黄色い声を張り上げていたところが見える。いまは大道芸人たちが活躍する元野菜市場コヴェント・ガーデン・ピアッツァが目の下に広がっている。

☆　☆　☆　☆

ドミンゴの活躍は彼のヨーロッパ・デビュー間もないころから見ているので 80 歳を過ぎてなお活躍している姿を見るのはうれしい。

テノールからバリトンに転向したが、やさしさと力強さを併せ持ち、劇場の隅々までに広がる声量、ドミンゴの声につつまれている感覚は劇場に行かなければ味わうことのできない貴重な体験である。加えて彼の演技力は歌手の中でも屈指のものだ。ちなみにドミンゴがこれまでに歌った役は前人未踏で 200 を超える。

30 年ほど前の話しだが、ニューヨーク・メトロポリタン・オペラが日本に引っ越し公演を行った。当時ニッカ・ウィスキーのコマーシャルで一躍有名歌手となったキャスリーン・バトルがパヴァロッティとドニゼッティの「愛の妙薬」で共演。ドミンゴはヴェルディの「仮面舞踏会」でスウェーデン国王役を歌った。もう一つの演目はワーグナーの「ワルキューレ」だった。

縁あって私は裏方仕事に駆け回っていたが、「ワルキューレ」開幕寸前にノー・ショーの VIP チケットをもらって NHK ホール 2 階正面席に滑り込んだ。隣の席が空いているのが気になったが。指揮者のレヴァインが渾身の一振りを下ろした途端に隣席に素早く腰を下ろしたのは誰あろうドミンゴその人であった。

「ワルキューレ」というオペラ（正しくは楽劇というが）は全てを上演するには 4 晩かかるワーグナーの代表作「ニーベルングの指輪」の第 2 部で上演時間 5 時間という途方もない大作である。第 1 幕はジークムンドとジークリンデという兄妹が主人公である。ドミンゴは舞台でジークムンドが歌っている間中囁くような声で一緒に歌っていたのである。私は隣のドミンゴの声に気を取られて舞台を見るどころではなかった。1 時間ほどで第 1 幕が終わると彼はすっと立ち上がり驚く観客をしり目に去っていった。彼は数年後にジークムンドを歌うことになっているので、そのために予習を行っていたというわけだ。

彼はヘンデルやグルックのバロック・オペラから中国現代作曲家のタン・ドゥンの「始皇帝」（このオペラは中国語ではなく英語）まですべて原語で歌う。日本語のオペラは彼のレパートリーにはないが、日本のリサイタルのアンコールに「川の流れに」を歌ったことがある。松田聖子とのデュエットは CD にもなった。25 年位前のことだが。

有罪となったハリウッドの映画プロデューサー、ワインスタイン氏によるセクハラ問題は Me Too 運動となりかなりの数の有名人たちが訴えられた。ドミンゴもその一人である。アメリカで 20 人以上の歌手が 1980 年代からドミンゴからセクハラを受けたと訴え出た。ドミンゴは「心から申し訳なく思っている」と謝罪し、それまで勤めてきたロサンゼルス・オペラの総監督を辞任した。アメリカでの活動はこれで終わりを告げたと思われるが、一方ヨーロッパではまだまだ彼の出演は続いている。

☆　☆　☆　☆

ロイヤル・バレエには金子扶生、平野亮一、高田茜などトップ・ダンサーが 3 人もいるが、ロイヤル・オペラに日本人歌手が出演することは稀である。その代りと言うこともないが、韓国人歌手の台頭は目覚ましい。ロイヤル・オペラでは最近立て続けに二人の韓国人テノール歌手がデビューして専門家の間でも好評を得ている。ワーグナーオペラの総本山バイロイトでさえ重要な役を歌っている。今年のグラインボーン・オペラの「ラ・ボエーム」には主人公のルドルフォ、「フィガロの結婚」でも主役スザンナを韓国歌手が歌っている。日本人歌手はいったいどうしたんでしょう。

ロイヤル・オペラには世界中から厳選された歌手のための本格的プロ養成コースがある。歌の指導はもちろんのこと、語学、演技指導の他に、本舞台に立つこともできる。彼らとって何よりなのはお給料が出ることである。

2008 年 9 月から 2 年間このコースに在籍した中村恵理さん（44 歳）に日本の音楽雑誌のために 6 月にインタビューを行った。コヴェント・ガーデン・ピアッツァを見下ろすオペラハウスのカフェに現われた中村さんは小柄な体をベージュのコートに包み、喉を守るためにパステルカラーのスカーフをふわりと巻いていた。

中村さんは兵庫県生まれ。阪神淡路島大震災のあった年に中村さんの高校では市民激励を意図してベートーヴェンの第九（合唱付き）の演奏会を行った。その時合唱団の一員として歌った時に「あら、私、高い声が出るわ」と気づいたことがその後の彼女の運命を変えることになった。しかし歌手になるつもりは毛頭なく、教師資格を取るために大阪音楽大学に入学。大学院まで進んだ。新国立劇場のオペラ研修所を受験してみた。落っこちたら先生になるつもりだったが、見事に合格。プロを目指す決心がついた。その後アムステルダムでも 2 年間の研修を終え、難関をかいくぐってロイヤル・オペラの養成コースの一員になることができた。

蝶々夫人：　Tristram Kenton 撮影

コースが始まって間もなく初舞台を踏んだ。リヒャルト・シュトラウスの「エレクトラ」だった。大音響が続く激しいオペラである。彼女の役は第 5 の侍女。声を発するのはほんの数秒にもかかわらず、開幕から約 1 時間は舞台の床にうつぶせになったままという異色のデビューだった。在籍中に現在最高のソプラノ歌手とされるアンナ・ネトレブコの代役でグノーの「ロミオとジュリエット」でジュリエットを歌い世間をあっと驚かせた。

ロンドンに残りたかったが、ビザの問題でつまずいた。ミュンヘンのバイエルン・オペラが救い主だった。6 年間の専属契約で数多くのオペラに出演。ミュンヘンを本拠にしてフリーランスとしての活躍が始まった。

プッチーニの「マダム・バタフライ」は日本人にはおなじみだ。15 歳の芸者の蝶々さんがアメリカ海軍士官のピンカートンと結婚したものの、結局は捨てられるという現代では全くお呼びでないストーリーである。かわいそうなイメージとは違い、この役を歌うには強靭な声が必要である。おまけに 2 時間以上の舞台に出っぱなしというえらくエネルギーのいる役なのである。中村さんの声はリリコという柔らかい声であったが、年とともに深みのあるドラマチックな声に変わってきた。やっとバタフライが歌える声に成熟したわけだ。マンチェスターにあるハレ管弦楽団は今年 6 月の定期公演で「マダム・バタフライ」を上演した。

蝶々夫人　：　Tristram Kenton 撮影

中村さんは衣装は着けるが、舞台セットのないコンサート形式で歌い、好評を得た。同時期にロイヤル・オペラでも「マダム・バタフライ」が上演されており、バタフライ役はアルメニア人とロシア人歌手が予定されていた。ところがウクライナ戦争の関係だったのか、ロシア人歌手のビザが下りなくなり、マンチェスターでリハーサル最中の中村さんに急遽代役の話しが飛び込んできた。ロイヤルで日本人がバタフライを歌ったのは若くしてガンのために亡くなった渡辺葉子さん以来 30 年振りのことであった。

2 年間のコロナ禍の間は日本での演奏活動以外ほとんどミュンヘンで一人で過ごした。「先行きの見えない状況下にあって、音楽家が本当に必要なんだろうかと疑問を持ちました。パンデミックが収まっても、まず私より有名な歌手から舞台に立つでしょうし、まして私の声域は最も競争が激しい。これまで日本でも海外でも十分に歌わせてもらってきたのだから、歌手を引退して私が経験して得たものを若い人たちに伝えるべきではと真剣に考えました。」

現在は日本滞在時に客員教授として東京、大阪の大学でレッスンを行なっているが、未だ海外留学が困難な学生たちに世界のオペラ業界の今を少しでも伝えたいと、演奏活動と後進の指導とのバランスを模索している。

ロイヤル・オペラで歌以外に学んだ事は何ですかと尋ねたところ、「自分を守ること」という言葉が返ってきた。研修の始まった日に全員にオペラハウスからセルフマネージメントについての話しがあった。
当時はフェイスブックやツィッターが広がりつつあった頃だった。代役出演やカーディフ国際声楽コンクールでのファイナル出場が BBC で放映されるなど、スター歌手への登竜門が開かれたと同時に、オペラ業界やメディアに突然晒され、精神的に不安な時期があった。その後様々なソーシャルメディアがオペラ業界にも多大な影響を与え、これらへの参加は避けられないご時世となっているが、ロイヤル・オペラで学んだ「自分を守ること」の大切さを胸に、これからも地道に活動を続けていきますと締めくくった。

女に生まれた為の戦い

ビドル　恵

先ず、生まれた時に女の子だったので、父親にがっかりされた。姉には「えり子」という美麗な名前を付けたくせに、私にはせめて名前だけでも～と思ったのか、「恵」と書いてメグムと読ませる、男みたいな名前を選んだ(母がメグミにすべきだと頑張ってくれた)。小学校に上がると同じ学年に、同姓で名前が「裕美」という可愛らしい男の子がいた。私は髪も短かかったし、先生によっては私の名前をケイとも読んだから、彼と取り違えられる事が度々あって、それは男女の制服が違う中学校に入るまで続いた。

「女の子に学歴は要らん」とか言って姉に進学を断念させた父は、私の番が回って来た頃には考えが変わったらしく、受験勉強を奨励してくれた(女の子だとは思っていなかったりして)。普通の“事務所

のおねーさん”になる気の無かった私は、建築士を目指して帯広工業高校の建築科を志望したが、男子校でも無いのに受験生は殆どが男の子で、女の子は数える程しかいなかった。いやーな予感通り結果は不合格だった。

諦めて足寄高校普通科に通っていた時に、工業高校の教師に詳細を聞く機会があった。実は、試験に合格した女の子は私一人だけだったらしい。一人の女子生徒の為に保健体育教師(公立高校の必須科目)の雇用が必要な事。トイレは職員用で済ませるとして女子更衣室はどうするのか？ 等々、受け入れ対処策を教職員達で協議した結果、「最低でも女の子が 二人合格していれば、話し相手が居たのにねェ〜」「たった一人での学生生活は難しいでしょう」「まあ〜 今回は、諦めてもらいましょうか」という事に決まったそうだ。女の子だった故に、建築士への夢を断ち切られてしまった。

高校の卒業と同時に自立を強いられ、化粧品販売という女の領域みたいな職業を選んだのに、男性群に頭を押さえつけられた。入社式の挨拶に「腰掛け気分ではなく、目的意識を持ってしっかりと仕事に取り組みたい」と言ったら、大阪本社から出向いていた部長に「女の子はなァ、野心など抱かんと接待業をキチ〜ンとこなして、身嗜みを身につけてな、結婚して良い家庭を持つのが幸せなんや」と決めつけられた。案の定、販売成績の如何に関わらず、店長や人事課の上司(男ばっか)に気に入られるかどうかで、派遣される店も決まった(毎月の会議で女の子の配置換えを、“はないちもんめ”の気分でやっていたらしい)。

80 年代はカタカナの職業が憧れの的だった。グラフィック・デザイン基礎科とイラストレーション科の修了を控えた私は、アチコチの広告代理店に就職活動を始めた。ポートフォリオを見せると「アーティストさんなんだねー」といった嬉しい反応が返って来るが、「ぶっちゃけた話ね、力量が同じだったら我々は男の子を選ぶわけよ。男は仕事に一生をかけてくれるから仕込み甲斐も有るけれど、女の子はやっと仕事が出来るようになったなぁ〜と思ったら、結婚して辞めて行くじゃない？」と、どん底に突き落とすような事を言われた。それでも何とか大手の下請け会社に就職し、印刷に回す版下作業をする傍ら、煽てられてパンフレットのイラストや、マーチャンダイズのキャラクター描きもしたが、それが “フリーのイラストレーターへ外注する出費を抑える為”と分かってからは、この世界にも幻滅した。締め切りが迫ると徹夜作業は当たり前だし、終電に乗り遅れては雑魚寝を強いられ、風呂にも入れず、タバコのヤニ漬けの日々が続いた(喫煙量は一日に 30〜40 本になった)。

母親に「男に頼らずに生きて行けるようになれ」と言われ続けて育ったから、男社会の中で生理不順と円形ハゲに悩みながらも頑張っているのに、その母親からは何時までも独身で居る事を、親不孝しているように言われた。グラフィック大賞に一緒に応募したり写真展を手伝ったりと、5 年越しの付き合いをして来たカメラマン志望の彼は、ある日突然、両親に説得されて田舎に帰ってしまったし、一緒に酒盛りして騒いだ(私は飲めませんけどね)友人達は、皆んな結婚して散り散りになり、引き出物だけが溜まって、独り東京に取り残された私は、29 歳のどん詰まりだった。

そんな時に英国人と知り合って、私は「えいっ！」と勢いで結婚してしまったのだけれど(母を更に失望させて)、マジッシャンの旦那に唆されて英国の彼方まで来て、エンターテイメントの世界で生きるハメになった。私は此処でも男社会に阻まれた上に、人種差別とも戦って行かねばならなくなってしまうのだが …… 其れは又、別の話。

戦いすんで

古川隆

子供の頃「鬼畜米英」と教わった嘗ての敵国の女性を伴侶に持ち、その国で生を終えようとは夢想だにしなかった。ひょんな事から知り合った英国人の妻と約10年間日本で暮らしたが、年老いて来た両親を気遣う妻の意向を受け、この国へやってきたのは1983年6月。

当時の英国は、サッチャー政権。フォークランド紛争に勝利を収め戦勝気分に浮かれていた英社会だったが、経済的には大変な時代。政権は炭鉱閉鎖をめぐる労働組合とのせめぎ合いに加え、対IRA作戦に大童。テロ活動対策の一つとして爆破物設置を防ぐためロンドン市中からゴミ箱が消えてしまうという状態だった。事実、シティのビルの近くで爆破事故があり、窓ガラスが粉々になるという出来事もあった。

そんな英国の経済・社会状態を尻目に日本はバブルの真っ最中。「ジャパン・アズ・ナンバー・ワン」などと浮かれていて、当時の日本人人口は約8万人とも言われていた。お昼時にシティを歩くと日本レストランへ繰り出す日本のビジネスマンを目にするのは、ごくありふれた風景だった。

金無し、コネ無しでやってきた英国で幸運にも英国企業で職を得、簡単な翻訳の仕事を気楽にやっていた。数年間を英国で過ごし、それ以後はアフリカ行きのシルバー・ボランティアの仕事に応募するつもりだったが、10年間の日本生活で恵まれなかった子宝に授かり、いささか慌てた。とりあえずアフリカ行きはご破算。しかし、この会社の安月給では先行き親子３人の生活を維持するのは難しい。どうなるかわからないが、本来の能天気から辞職し、日本でちょっとやっていた翻訳と出版の仕事を始めることにした。

まず手がけたのが、「The Highway Code（英国交通法規)」の日本語版。当時の日本人は、英国で運転免許を取得しなければいけなかったので、出版当初はよく売れた。が、一年 足らずで日本の免許証からの書換が可能となり、売れ行きはガタ落ち。今では、単行本としては存在しないが、「英国生活ガイド＝Living in Britain（A Concept 発行)」の巻末に掲載され残っている。

当時の駐在員にとってのエンターテインメントと言えば、一般の英国人が利用できないほど高額な日本レストラン行きか、カラオケ装置を備えた飲み屋でひと時を過ごすか、ウイークエンドのゴルフ。ただ、日本人がプレーできるゴルフ場は限られており、日本企業の経営するHatfield（現在のEssendon Golf Courseの Old Course)か Hampshire のOld Thorns（いずれも既存のコースを買収したもの）が主なコースだった。

日本では殆どやっていなかったゴルフだが、英国の友人に誘われてSouth Hearts Golf Clubのメンバーに応募、初年度はウーイークデー・メンバー、その後セクレタリー、キャプテン及び紹介会員の四人でラウンドを回り、マナーや一般的なルールの知識を試され始めてフル・メンバーになることができた。入会金さえ払えば、ほぼ誰でもメンバーになれる現在とは大違い。

余談だが、ゴルフのクラブの握り方には、オーバーラッピング・グリップ(ヴァードン・グリップ)、インターロッキング・グリップ、テンフィンガー・グリップの三通りがある。

オーバーラッピング・グリップは、The Open 6回（1896, 1898, 1899, 1903, 1911, 1914)、1900年度 The U.S. Open 優勝の名選手ハリー・ヴァードン(Harry Vardon)が考案したもので、彼のホームグランドが、この South Hearts Golf Club。

その功績を今に残そうと、同 Club のロゴはヴァードン・グリップを図案化したもの。
ある日、仕事を手伝って貰っていた英国の友人=Philipp Young が面白い話を持ち込んできてくれた。
「Royal Blackheath Golf Clubと言うイングランドで最古と言われるコースが目下財政難に陥り、クラブハウスやコースのメインテナンスにもこと欠いている状態で、その打開策として法人会員の獲得を考えている様子。我々の方で日系企業にアプローチできないだろうか？」という相談を受けた。
「面白いね。できると思うよ。だけど、どこからそんな話を聴き込んだの？」
「クラブのセクレタリーの知り合いからの話なんだけど、もし、我々で法人会員の斡旋ができるなら、一度彼に会ってみてはどうかと思うけど、どうだろう」
「そりゃ、早速話を進めようや」と私はいつもの軽い調子で返事。
某日友人と二人で元陸軍少佐のセクレタリーを訪ねて行った。ハウス内には小さいがゴルフ博物館があり、ハウス内は勿論、バーでもジャケット・タイ着用という格式を保っていた。が、なるほど設立400年を越す立派なクラブハウスやコースはかなり痛んでおり補修を必要としていた。

早速、法人会員募集要項金額やそれの伴う年会費などを提示すると、セクレタリーは大いに乗り気になり「良い話だと思うよ。早速、近々ボード・ミーティングにかけ、その場でこの計画を議題として提示し、実現に向け努力しよう」という話。
当日は友人とラウンドを行い事務所へ帰る途中、入ってくるコミッションの額に胸を躍らせたものだ。数日後、セクレタリーから連絡があり、
「ミーティングの前にキャプテンと話したところ、ほぼ問題ないだろうということなので、そちらの話を進めてほしい」という話。夕方には友人とパブで乾杯。
翌日から兼ねてリスト・アップしていた大手企業へのアプローチを開始。得意先や、政治家、官僚の接待ゴルフの会場探しに四苦八苦していた金余りの企業にとり我々の提示した金額（入会金5万ポンド＋年会費2千ポンド）は大したものではなく、シティから20分ほどの至近距離という至便さもあり、話はトントン拍子に進み、一週間足らずで予定の五社が決まり、近々クラブ見学方々ラウンドを行おう、という運びになった。予定されていたボード・ミーティングの翌朝、電話を受けた女性が
「フィリップ、あなたに電話よ」
満面に笑顔を浮かべたフィリップが受話器を手に取り話していたが、暫くすると笑顔はすっかり消え去り、眉間にシワがより、そのうち受話器を下ろし、なんとも言えない顔つきで私に向かい泣きそうな顔で、「隆、バッド・ニューズ。あの話はダメになってしまった」
「どういうこと？」問い返す私にフィリップは、次のように話してくれた。
「キャプテン曰く。大変申し訳ないが、法人会員の話は無かったことにしてほしい。理由は、有力なボードメンバーの一人の猛反対があったため。彼は、嘗て日本軍の捕虜となり泰緬鉄道建設に従事させされ酷使されたが、あのような筆舌に尽くし難い非人間的行為を行った日本人の残虐性を絶対に許すことはできない。従って、私個人としては、日本人の会員加入には断固反対。どのような手段を取っても反対する。これに対しては他のボードメンバーは何も言えなかった、ということ。残念だけど、どうしようもないよ」というセクレタリーの言に、返す言葉もなく引き下がらざるを得なかった。以後数日、加入希望の企業への謝罪訪問に明け暮れたことは言うまでもない。
先人の犯した蛮行がこのような形で我々にふり掛かってこようとは、夢想だにしなかった。

付記：2002年に小生が出版した小冊子「英国ゴルフ場ガイド」には、4ヶ所の新設コースと買収した既設コースを合わせ13の日本企業経営のゴルフ場が掲載されていた。しかし、現在、日本企業経営のゴルフ場は０。時代の流れを感じさせる。

カチンコの前にあなたが居た

渡邊道英

私は 1965 年三月大学を卒業するとともに映画監督を目指し、大映株式会社京都撮影所、製作部監督室に助監督として採用された。助監督の最初はカチンコを打つことから始まりました。

シーンの始まり、カットの最初に俳優さんとカメラの前で監督が「本番！用意スタート」の声を聞くや
カチンとカチンコを打つことでした。このカチンコは真っ黒に塗装した板にシナリオのシーンのナンバーとカット No. を白墨で記入 OK が出るまで繰り返します。その際録音部記録テープに記録されるようカチンと音がする仕組みになっていて、後日フイルムの編集の際、音の長さもシンクロされるように仕組まれています。簡単に思われるでしょうが、大変重要な作業になっています。

さて、私が大映京都撮影所に入社時にはかつての名優、大女優さんたちは現場から東京、大阪などの大劇場に出演されていて、撮影所の中は当時全盛時であった、市川雷蔵、勝新太郎を中心に映画制作がなされていました。長谷川一夫、京マチ子、山本富士子さんの功績は衣装部さんが大切に保管されていた白足袋、草履などが仕舞われたケースが棚にきちんと並んでいました。これらを見る以外には、正確にはご一緒していません。ただし皆さん方の活躍は、国立近代美術館（アートシアター）保存上映されているネガから起こした名作映画の数々を何度も拝見してきました。

京マチ子さんの訃報がロンドンで報道されて

京マチ子さんの訃報が報道されて以来、かつて私が青春をかけた映画制作に携わり、沢山の俳優さん、女優さんたち知った名門、大映京都撮影所のことを考えることが多くなりました。これを機会に大映の映画制作に多大の貢献と世界的な素晴らしい映画の主役を務めた京マチ子さんの事は若い世代の皆さんにお伝えしたいと願っておりました。
私は京マチ子さんと最初に出会ったのは学生時代。東京京橋にあった国立近代美術館のスクリーン上でした。今や世界的な監督黒澤明の『羅生門』でありました。芥川龍之介原作で橋本忍のシナリオで大変難解なテーマでした。

女優名鑑が京マチ子について次のような記事を載せている

- 大映の誇るヴァンプ女優（妖婦役）NO1 といえばやはり京マチ子である。大阪少女歌劇（OSSK）出身でダンスもいけるし、
- 立ち居振る舞いも美しい。しかも肉体派という言葉が相応しく黒澤明監督『羅生門』(1950)、衣笠貞之助監督『地獄門』(1953)
- さらに溝口健二監督『雨月物語』(1953) 国際的にも認知され「グランプリ女優」と称された。
- 是をキッカケにハリウッド MGM の『八月十五日の茶屋』(1956) ではゴールデングローブ賞主演女優賞にノミネートされた。
- それを経ての昭和 30 年代の京マチ子が放つ貫禄と成熟した大人の雰囲気は大映作品に風格を与えた。
- 市川崑監督がマヒナスターズのヒット曲をヒュウーチャーしたメロドラマ『あなたと私の合い言葉さようなら、今日は』(1959)
- では結婚適齢期を過ぎつつあるヒロインを若尾文子と大学同級生で大阪の料理人を切り盛りしている女将を京マチ子が演じている。

- けどどう見ても若尾文子と同年代には見えない貫禄がある。若尾文子が佐分利信の父を放って置けないから、
- 親が決めた婚約者菅原謙次に縁談を断って欲しいと、京マチ子に頼む、代行で断りに行った京マチ子が菅原謙次に一目惚れして
- 猛アタックするという展開。大阪のやり手の女将の雰囲気が京マチ子の成熟したイメージにピッタリで、
- 明らかに小津安井二郎の『彼岸花』（1958）で山本富士子が演じた京都の旅館の娘のパロデーだけどムンムンした色気が良い。
- オムニバス『女経』第三話（1960）監督吉村公三郎でも京都の旅館、バーを切り盛りする『恋を忘れた女』を
- 仲村鴈治郎に「寝よう」と誘われてサラリと交わす演技などはお見事であった。

京マチ子の代表作品リスト

『羅生門』1950 年　　監督　黒澤明　撮影　宮川一夫　主演　京マチ子　三船敏郎

『偽れる盛装』1951 年　監督　吉村公三郎　撮影　中井朝一　主演　京マチ子　小林桂樹

『雨月物語』1953 年　　監督　溝口健二　撮影　宮川一夫　主演　京マチ子　森雅之　田中絹代

『地獄門』1953 年　　監督　衣笠貞之助　撮影　杉山公平　主演　京マチ子　長谷川一夫

『赤線地帯』1956 年　　監督　溝口健二　撮影　宮川一夫　主演　京マチ子　若尾文子　三益愛子

『鍵』1959 年　　監督　市川崑　撮影　宮川一夫　主演　京マチ子　叶　順子　仲代達也

『浮草物語』1959 年　　監督　小津安二郎　撮影　宮川一夫　主演　京マチ子　中村鴈治郎　若尾文子

私の麻雀

早乙女健之

日本より遥か洋上を隔てて英国の地に私は何をしに来たのか。

人生の終盤に私が楽しんでいるのは・・・。そうです、みなさん一度は聞いたことがあるゲーム、マージャンです。では何故マージャンをするのだろう。一度覚えたら止められなくなる魅力のあるゲームなのです。それは、ほかのゲームと違うからです。単純ですが、色々の上がり方があるゲームです。囲碁や将棋は二人でさします。そして、例外なく強い人が必ず勝ちます。ところがマージャンは４人一組のゲーム、そして囲碁や将棋とちがい、強い人が必ず勝つと言えません。マージャンを始めたばかりの人でも往往にして勝ときがあります。

１）運麻雀というゲームは運が６－８割、勘が１－３割、経験が１－３割ぐらい作用するゲームだと思っています。つまり運がいいと、だれでも勝つゲームなのです。残念なことには、運というものはずーと続くことはないのです。必ず負けるときがあります。まるで人生そのものです。
２）勝ち方は単純である
一から九の組み合わせにより色々とある。ほかに字牌、風杯がありますが、単純な組み合わせかたにより

色々ある故、その組み合わせかたを考えるので、あきがこないゲームなのです。
３）ゲームは４人一組でします
４人集まれば、何とかで、色々な話に花もさくし、ゲーム中でも話をしながらできます。一回のゲーム時間は大体１-３時間ぐらいなので、ゲームの前後、ゲームの合間に休憩して、ひと時のだんらん。お茶を飲んだりして、このお喋りタイム、エンジョイ　タイム。みんなにとっての楽しみの時間です。

４）痴呆症予防に最適なゲーム
マージャンは小さなブロック（１０種類）　１３６個みんなでかき混ぜそれを裏がえしして積み上げて、順番にとっていくので、腕と指先とでブロックを並べ積み上げ、順番にブロックを一つ山から取りいろいろな組み合わせを考え、他の人が捨てたブロックを見て最適なブロックを一つ捨てる。そしてみんなと会話をしながらするので、私は自称、痴呆症予防に最適なゲームと言っています。

５）ゲームから降りる難しさ
テンパイといってあと一つブロックが来れば上がりのとき、特に自分の手の内が素晴らしい手のときは、そこから降りる勇気が必要ですが、伸るか反るか（いちかばちか)、たまに上手くいく時があり、賭けてみたくなるものです。私はこれが麻雀で一番難しいことだと思っています。また運がないときにいかに負けを少なくするかです。これができれば、大負けはしませんが、運を賭けての遊びのゲーム、楽しみましょう。

私が麻雀をはじめたのは日本で１９６０代です。最初は何もわからず、悪友たちに誘われて麻雀をはじめました。勿論お金を賭けました。当時私は出ると負け。ルールも全然わからないのでやると負け。皆のいいカモでした。そんな私にたいして、みんなからは授業料を払わずに覚えるなんて虫の良いことを考えるなと言われ、勝つことはありえなかったのです。はい、だいぶ授業料を払いました。そのうちに少しずつルールがわかり、たまには勝つことができるようになりました。

それから数年、職場の人や他社の人、雀荘に通い続けました。徹夜マージャン（徹マン）の連続、当時雀荘(麻雀をするお店)はたばこの煙が部屋中にたちこめていました。麻雀をしながら、丼ぶりものをとりよせ、食べながら麻雀をしてました。ゲームの終わりごろになると、トップでゲームをしている人は自分の点棒を数えて、“Shrewd way to win the game”つまりなんでもいいから(汚い勝ち方でもいいから)上がって勝ちをつかむようになる。何しろ金がかかっているからです。
リーチ(あと一つでゲームに勝時)をかけると、てんぱいタバコと言ってタバコを吸ってだれが振り込むかをまっていました。また、終電に間に合わないと、徹マン(夜通し麻雀をつずけること)をして翌日もまた同じように繰り返しの生活をくりかえしていました。

会社のお客との接待麻雀、お客がマンガンという上がりかたをするとジョニーウォーカー、コヒーかん、ＥＴＣのご祝儀品をさしあげたり、といろいろなことをしてました。勿論私がたくさん勝つと後から会社の上司の人から文句をいわれる故、私は何度か上がって（勝って）いたのにそれを見送ったことがありました。私が負ければ私の自腹で支払うはめになってしまう。仕事のためとは言え、全くすっきりしない麻雀もしました。日本にいたときは、私にはお金を賭けない麻雀はありえなかったのです。

マージャンも賭け事の一つですので、お金をかけてするのが普通です。しかし私は英国にきてお金を賭けたことはありません。それは私の経験といい年をとって、お金を賭けて勝った負けたと喜んだり傷ついたりしてもしょうがないと思っています。それよりもみんなと和気あいあいゲームを楽しみ、会話、お喋りを堪能したほうがよいと思っているからです。

今、私は皆さんと賭け金なしの麻雀を楽しんでいます。私たちの仲間はみんな日本で育ち、成人してから英国に来られた方々です。残りの人生をこの英国の地で、昭和の娘さんたちと母国語である日本語で色々な話に花を咲かせ、お茶を飲みながら、麻雀をし、みんなで楽しい一時を過ごしています。

シャンソンとサンソンの不思議な関係

飯塚忠治

皆様に共感いただけるかどうかは甚だ心配ですが、個人的な思いを語らせていただきます。

今日の言葉は山村です。
それは私の生まれ育ったところだからです。私が新潟県の今では長岡市に組み込まれましたが、その当時一日往復の町に出るバスが４本くらいだったと思いますがその終点の山間の村といえばどんなところか想像いただけるのではないかと思います。
芸術文化的な香りがどのくらいあったかと今考えてみれば、例えばその当時の東京のそれを１００としましたら１あればよかったくらいだと思います。まだ TV の普及もそれほどでなく首都からの芸術文化伝搬は谷川岳にまず遮られれか（?）新潟県に入っても山間までは入りにくかったというのが事実だったと思います。それにもまして農家の生活は厳しかったのがその当時全般に言えることでした。

私がたぶん小学６年生、または中学一年生のころです。NHK　ラジオの日曜日の午後３時から聞こえてきたメロディー、フランスのシャンソンでマリオネットという曲で、これは NHK の午後のシャンソンという番組でした。私は理由もなくこの番組を心待ちにした記憶があります。シャンソンの響きに感動したというのが一つ、そしてこの番組で流されるシャンソン曲を解説してくれた蘆原英了さんの渋みのある、しかも粋な語り口調になぜか魅了されていました。

蘆原英了さんのことを今回調べてみましたら、軍医の四男として生まれ、１９３２年にフランスに留学、シャンソン、バレイ、演劇などを学んだことが今になって知りました。彼の叔父で画家の藤田嗣治、乳白色の裸婦像はあまりにも有名です、がいることがわかりました。

最近、このことを思い出しながらなぜ、先ほど申し上げたように田舎に育った、１２歳の私がフランスのシャンソンにこれだけ惹かれたのはふっと考えてみたのです。
そしたらあるとき、その答えが閃いたのです。私の生まれ育った環境がすごく良かったからに違いない、経済的にということでなく、それは山間の村に育ったことがその源であると。
冒頭に申し上げました KEY　WORS　山村をフランス語風に発音してみてみますと、そうです。

実はなぜというのはわかりませんが、私が最初に外国文化芸術に触れたのがこの番組だったのは確かです。冗談のような本当の話し！

北海道の森の妖精

ビドル　惠

北海道の動物はサハリン(樺太)やシベリア、カムチャッカ半島など北方系の動物との共通点が多く、生息地域の南限が津軽海峡で阻まれている為に、本州とは異なる独特の進化を遂げた。こうして誕生した亜種には、北海道を意味する蝦夷(エゾ＝Yesoensis)という名前が付けられている。

津軽海峡を挟んだ動物分布境界線(本州のツキノワグマ、ニホンザル、イノシシなどの北限で、エゾヒグマ、エゾシカ、エゾユキウサギなどの南限)は、幕末から明治にかけて日本に滞在したイギリスの軍人/動物学者 Thomas Wright Blakiston によって提唱されたので、ブラキストン線と呼ばれている。ブラキストンは日本の野鳥研究や、日本で初の気象観測などを実施する傍ら、本州と北海道の動物の違いをアジア協会報に発表し、動物分布境界線の存在を指摘した。この功績を讃えて、津軽海峡を望む函館山の山頂には、彼の肖像を刻んだ石碑が設置されている。と何やら堅苦しい書き出しになってしまったけれど、要は北海道の動物が如何にユニークで可愛らしいか(あくまでも個人的な意見ですけどね)を言いたかった訳で、今後少しづつ紹介させて頂けたら～と願う。

「お呪いをして消える神様、エゾリス」

北海道、日本ハム・ファイターズのマスコットキャラであるエゾリスは、ユーラシア大陸に生息するキタリスの亜種で、本州のニホンリス/ホンドリスよりやや大きい。雄雌の個体差はあまり無く、体長は22～27cm、尾の長さ16～20cm、体重330～470g。毛色は一年中ほぼ同じで腹側が白く、背側が茶色味のある灰色から焦げ茶色。冬期になるとこの毛の密度が増し、耳介に4～5cm程の長い毛が上に向かって伸びる。又、尾の毛の長さは 5cm もある為に太くフサフサとして見える。

森林地帯や街中の公園など北海道の広い地域に生息して、クルミやドングリ、松の実、イチイ、ヤマブドウを好み、時には花や昆虫も食べる。冬眠はせず、樹洞や幹と枝の又部分に小枝や枯れ草、樹皮の繊維を利用して巣を作り、越冬の為に木の実などを土中に埋め込む。小さい身体の割に活発で力持ち、真冬になって雪に埋もれてしまった実を、50～60cm も掘り起こして探し当てる事ができる。

警戒心は強いけれど、街中では結構人懐っこくなり、愛くるしい様々な仕草に人気があるので、公園に餌台が設けられたり、訪れた人が餌を与えたりしている。エゾリスの方も慣れたもので、人の手から餌を直に取って食べたり、大胆にも餌をねだって、人の身体によじ登る個体さえ居る。アイヌ語ではトゥスニケカムイ(トゥス＝巫術、ニケ＝消す、カムイ＝神)。前足を擦り合わせる仕草がお呪いをしている様なのと、動きが敏捷なので直ぐに見失ってしまうことから、“お呪いをして消える神様”と呼ばれている訳で、聞いただけで楽しくなってしまう。

又、エゾリスは(リス全般やムササビなども含む)エビフライを作るのが得意なので “秋の森のエビフライ探し” が楽しめる。と言っても、森の中の洋食屋を探す～という話では無い。エゾリスが松ぼっくりの実を食べる時に、外側の鱗片を全て食い千切ってしまうので、齧り残された固い芯がエビフライのように見えるのだ。これを拾い集めて小洒落た皿に盛ってみるのも面白いし、話のタネにもなるので、秋に松の木の下を歩く時は、騙されたと思って探してみて欲しい。

「狩の縁起者、エゾシマリス」

「シマリスならペット屋さんで売られているじゃない」と言われる方もあると思うが、これはシベリアシマリス、或いは北アメリカ大陸のチップモンクの事で、エゾシマリスはその亜種。北海道と周囲の

離島にのみ生息し、保護対象なのでペットにする事は出来ない。アイヌ語では身体の縦縞を指してルウオプ(道が入る獣)、又はルオチロンヌプ(筋の付いた獣)。エゾシマリスに関してアイヌ人の考えは色々と複雑らしく、「冬に地獄へ行く奴」と呼んで狩の前に出会ったら不吉とする地域と、「熊の居場所を教えてくれるもの」として崇めた地域があったそうだ。

エゾシマリスはそんな人間の思惑などお構い無し、木の実を頬袋に詰め込んで、森の下生えを敏捷に駆け回る。体長は 12～15cm、尾の長さ 10～12cm、体重は 66～115g とエゾリスより遥かに小さい。毛の地色は灰～茶褐色で、後頭部からお尻までの背側に５本の黒い縦縞が入り、縞の間はクリーム色で腹側と耳の先が白い。ドングリや松の実、ナナカマド、木の芽や花など基本的には植物食で、子育て中の母リスは昆虫や小鳥の卵/雛なども食べる。生息地域は広く、森林限界である標高 2,000m の高山にも棲む。野生味と縄張り意識が強いので(エゾリスより獰猛果敢)、単独行動を好む。冬眠に備えて秋にはいっそう忙しく走り回り、木の実などを地下や岩場の巣穴に貯食するが、100%の個体が冬を乗り越えられる訳では無いので、これが「冬に地獄へ行く奴」と呼ばれている理由だと思う。

性格は臆病で繊細だが、一方で好奇心も強く活発である。人間など鮮やかにかわす自信があるのか、人を避けて迂回したりせずに足下を一直線に走り抜けたりする。又、時間をかけると慣れて人の手から餌を食べたりもするので、大雪山系、黒岳の展望台付近では観光客によって餌付けされ、警戒心の薄くなった個体がキタキツネに捕食されるケースが増えている。

「森の祠の微笑む神様、エゾフクロウ」

フクロウは日本全土に四種類ほど生息していて、南の方ほど羽色が濃く褐色で、北へ行くに従って白っぽくなる。北海道に生息するエゾフクロウは、全長 50～62cm、雄の体重が 500～950g で、雌の方がやや大きく 570～1,300g、開翼長は 94～110cm。全身の羽は白地に茶色の縞模様が入り、寒さから身を守る為に足の踵までびっしりと白い羽毛に覆われている。黒くて大きな眼球は頭部の前面に位置するが、眼孔に固定されているので動かす事は出来ないので、代わりに頭部自体を前後左右、上下方向に自由に反転させる。目の周りの顔盤と呼ばれる薄茶色の縁取りはハート型。

森林や里山、湿地、牧草地、農耕地、公園などに生息し、小型の哺乳類(特にネズミ)や鳥類、両生類などを捕食する。夜行性なので昼間は木の洞や枝に止まって休み、この時の寝顔が微笑んでいる様に見える事から“森の祠の微笑む神様”と呼ばれている。狩は待ち伏せ型で、木の上から音もなく獲物に降下して鋭い爪で捕まえる。羽音を立てずに獲物に近づく事が出来るのは、風切り羽にギザギザが入っている為で、この仕組みは、風力発電で使用されるプロペラの静音設計にも応用されている。又、耳孔の位置が左右異なる為に聴覚も優れていて、獲物の距離と方向を立体的に把握し、小動物が地表近くのトンネルや雪の下で立てる、微かな物音さえ聞き取る事が出来る。

エゾフクロウは単独かツガイで生活し、大木の樹洞/祠に巣作りする。春に産卵すると抱卵は雌が行い、雄が餌を運ぶ。孵化後は雄雌両方が交代で給餌し、雛は 35～40 日で巣立つ。鳴き声は雄が、「ゴッホゥ」「ゴロッケー」と良く通る声で鳴き、雌はそれに応じるように低く掠れた声で「ギャー」と鳴く。アイヌ語ではクンネレクカムイ(夜鳴く神)とか、イソサンケカムイ(獲物を追い出す神)と呼び、夜中の鳴き声が不気味で不吉とされたりするが、総体的には神秘的な守り神として敬われている。

「群棲する神様、エゾモモンガ」

亜高山帯森林のトドマツなどに住処、食糧、移動手段(樹間を滑空して移動する)の全てを依存し、その一生を殆ど木の上で過ごす小さな動物が居る。夜行性で警戒心が強い為に観察が難しく、詳しい生態もあまり知られていなかったのがエゾモモンガである。

アイヌ語ではアツカムイ(群棲する神)、又はアッカムイ(子供の守り神)と呼ばれ、森の可愛い神様として崇められている。体長は15～18cm(尾を入れても30cmに満たない)、体重100～120gと、同じリス科のムササビに比べて極小さい。本州のモモンガは毛色が灰褐色なのに対し、エゾモモンガは腹側が白色に背側が灰色、冬には更に白っぽくなるという雪国ならではの特色を持つ。

ふっくらとした顔立ちに、夜行性の特徴である大きくてつぶらな瞳はハート型に黒く縁取られ、クリクリとして可愛らしい。木を登るための鋭い鉤爪と、滑空を助ける為の飛膜(前脚の手首辺りから体側に沿って後脚まで)がある。尾はリスと同様長い毛で覆われて平たく、滑空時の方向転換や着幹時にブレーキの役割を果たす。松の葉や実、新芽、花、種子、果実などを食し、エゾリスと同様に冬眠はしない。天然の樹洞やキツツキの古巣に複数個体(2～5匹、多い時で10匹)で棲み固まる。アツカムイの呼び名通り、同種間ではあまり争わずに共同生活をし、お互いの体温で暖め合って厳しい冬を乗り切るのだ。

野生のエゾモモンガを目にする事は難しいので、見たい時は札幌市の円山動物園に行くのがお勧めだ。此処での飼育によって生態が次第に分かってきた事と、その姿の可愛らしさや性格の穏やかなところに人気が上昇し、身悶えして「ペットにしたい！」などと言う輩も居るとか(私です)。飼育員さんの話では「ハムスターと違ってトイレの躾が出来ず、かなり臭いオシッコを所構わず(人の肩や手の上でも)漏らすので、ペットにするのは無理です」との事だった。JR北海道のICカード乗車券 Kitaka のマスコットキャラ。

「飯炊きする小さな獲物、エゾタヌキ」

日本に於いて最も一般的で、歴史的にも馴染み深い野生動物は何と言ってもタヌキだ。目の周りが黒くて愛嬌のある顔立ちには親近感を抱いてしまうが、日本とその周辺の極東アジア、ヨーロッパの一部(極東から人為的に持ち込まれた)にしか見られない、比較的貴重な動物である。

北海道に生息するエゾタヌキは、体長50～60cm、尾の長さ18cm、体重6～10kg、被毛は茶褐色から淡い灰褐色で手脚や尾の先などが黒い。本州のホンドタヌキとの違いはあまり無く、あえて言うならタヌキの特徴である目の周りの黒い模様部分がやや小さいと言った程度だ。しかし冬籠りに備えて身体に脂肪を蓄え、更に密度が高くて長いフサフサの冬毛に生え変わると、「別の生き物なのでは？」と思わせる程に様変わりして、ホンドタヌキより遥かに大きく見える。

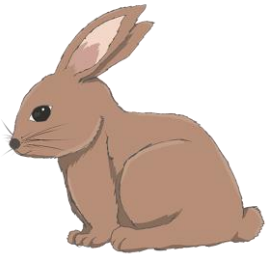
川や沼の在る森林に生息し、樹木の根元、岩の隙間などに空いた穴を利用して巣とする(自ら穴を掘ったりはしない)。敏捷性に欠けるので一般に狩はせず、地面に落ちている木の実、果実、ミミズ、昆虫、両生類など、その季節や環境で得られる様々な物を効率よく食べる雑食性である。ホンドタヌキは民家に出没して廃棄物を漁る事も有るそうだが、エゾタヌキは臆病なので人里には近寄らず、主に夜間に活動してその姿を人に見せる事は滅多に無い。又、足が遅いので他の動物に襲われる危険性が高い為、死んだふりをする“擬死”で誤魔化す能力を持っている。これは、猟師が打った銃の音に驚いて気絶してしまう～といった事でも知られ、本当は気絶していたのに「人を騙す為に寝たふりをしていた」などと言われて、“狸寝入り”の言葉の由来になったのだとか。

アイヌ語では単にモユク(小さな獲物)、アイヌ料理の定番食材だ。そしてエゾタヌキは、何故かエゾヒグマの狩の対象にされず、“襲われない”というユニークな特性を利用して、エゾヒグマの近くや使用されなくなった古い巣穴に棲んで身を守る。この習性はアイヌ人も良く知っており、ユーカラ(叙事詩)の中でもタヌキは“熊のお世話役”として描かれ、特に顔の黒い部分が大きい個体を「料理中に煤にまみれた為」として、スケモユク(飯炊きする小さな獲物)と呼んでいる。エゾタヌキがカマドの前で料理している様子を思い描くと、何やらピタリとハマりすぎて、微笑ましい気がするのは私だけだろうか？

猫の死

田村陽子

あれは 2018 年の秋、日本旅行から帰ってきた朝の事だった。
朝食の準備をしていると、フワフワの黒と白の混じった猫が裏庭の石段に足を揃えてチョコンと座っていた。



今、思うに、私が不在で、1 人ぼっちだった息子が寂しくなって猫をおびき寄せたのかもしれない。
そう言えば、息子が 5 才の頃、子猫を飼いたいとせがむので、学校の帰りにペット屋さんに立ち寄ったのだ。店員さんに話すと、私が外で働きに出ているなら、「5 才の子供には子猫の世話が出来ない」からと断られてしまった。そして「兎なら飼って良い」と。兎を飼い始め始めのうちは珍しさのためか、抱いたり庭に離したりして遊んでいたが、兎の単純さに飽きてしまって世話をしなくなった。
その兎がある日、寒さのために　死んでしまった。冷たく硬くなって横たわっていた。充分世話をしなかった事を反省した。

それから長い間、猫の事はすっかり忘れていた。学校の事、趣味や仕事の事、主人の病気との戦いなどで無口な息子の心の内を聞くもせず日々が過ぎていった。

そして 3 年半前の秋の頃、私が日本旅行中に、あの猫がやって来たのだ。その出会いを息子は語ろうとはしない。
私は猫の小屋を作ったり餌を用意したり、張り切っていた。
私が庭にいると足元に擦り寄ってきたり、芝生にふんぞり返ってお腹を撫ぜろ、と言わんばかりに睨んでいる。私が椅子に座っていると膝にピョンと飛び乗って、もぞもぞ動きながら眠りのポーズを決めて気持ち良さそうに目を細めている。

「ああ、今はその猫は、もういない！」

それは今年五月、主人の命日にお墓参りしている時だった。息子から電話、「猫が RSPCA に連れていかれる！」
２～３日姿を見せないから、何処へ行ったのかと心配していたのだ。そしたら、隣りのルーマニア人の家にいたのだ。「猫の様子がおかしいから呼んだ」、と。
息子が猫の病院に連絡を取ると、呼吸困難で酸素吸入を受けている、また腎臓機能が悪い事、赤血球が足りないから輸血が必要なこと。そのためこれまでの治療費に加え、更に 2000 ポンドは必要。そしてそれは命の保障にはならない。

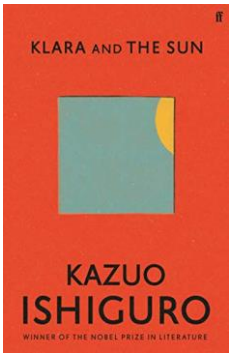
相談の結果、涙をのんで治療を諦める事にした。猫は病院で火葬される事になった。
猫の最後に立ち合えなくて残念でならない。
猫はたった 3 年半の生活の中で、沢山の喜びと生きる事の意味を教えてくれた。

チェロ奏者、カザルスが奏でるスペインのカタルーニャ民謡、「鳥の歌」(El Cant dels Ocells),
が何と心にしみることか！

カズオ・イシグロ
『　クララとお日さま　』
(Klara and the Sun)

小川のり子

以前読んだ２冊もそうでしたが、今回もこの本を読み終えて、何となく寂寥感に陥ってしまいました。風がわたる草原の深みに身をゆだね、まるで寂しさの余韻を味わうかのように、しばらくはそこから立ち去りがたい、そんな思いかとも言えそうです。以前の２冊とは、同じくイシグロ作の「わたしを離さないで」(Never Let Me Go)と「忘れられた巨人」(The Buried Giant)、そして今回私をそうさせた犯人はタイトルにあるクララで、もしかしたらこの作者も共犯だったかもしれません。



クララと呼ばれる人工頭脳を搭載した AF（Artificial Friend）と、病弱な少女ジョジーが大学に巣立って行くまでをともに過ごす日々を描いた、少々風変わりな物語です。２０１７年のノーベル文学賞受賞後初の長編小説だそうで、数年間の孵化期間があったかと思わせる、AI と人間の関係を浮き彫りにした興味深いテーマが扱われています。語り口では童話風を装っていますが、内容は人間の永遠の課題が込められているようです。実は、最初に読み終えた後、「これで終わってしまうのか」と寂しさと共に少々物足りなさも感じてしまいました。が、２度目になると、“人間の強さ、人間の弱さ、そして人間の愛”についても深く考えずにはおれなくなりました。

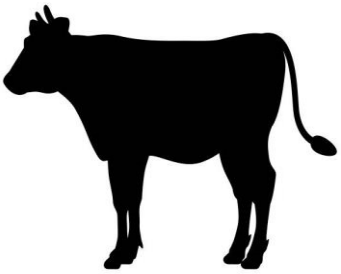
小説ではクララが、ジョジーの幼馴染で男友達でもあるリックに、「あなた達２人の愛は本物か？」と問うシーンがあります。「たとえ我々２人が結ばれることがないとしても、心のどこか深いレベルで永遠につながっているのではないだろうか」と言うリックの答えに、私も何となく納得してしまいました。“愛の終わりは愛の始まり”と言えば、まるで禅問答のようですが、一度結ばれた人間の“深い絆”はどんなに情況が変わろうと、永遠に心に残るものだと言いかえることが出来そうです。

近頃“AI”　という言葉が頻繁に使われます。人工頭脳と言うよりロボットと言った方がより親しみを感じられますが、実はそれがどれだけの機能を持つのか、私にはほとんど知識がありません。
この作品に出てくる主人公のロボット、クララは旧型の B2 型だそうですが、最新の B3 型もあり、それには臭覚、および優れた運動機能が装備されているとあります。運動機能ならまだしも思考能力も含め臭覚もあると言われる技術革新を満載した AI とは、どれほど人間に近づいているのか、もしやそれ以上なのかと気になります。

B2 型のクララですが彼女の観察力､洞察力はどの AF よりも抜きんでており､また知識吸収力も旺盛で、このままずーっと続けば、ヒューマンかそれ以上になったかも・・・と思わせます。一時期は、ジョジーの母親でさえ、病弱の娘の代わりとしてのクララを望んだくらいでした。しかしこの物語の最後は、現在のクララの居場所である廃品置き場で、昔世話になった店のマネージャーとお互いの思いを込めて語り合うシーンで終わっています。
「・・・今だから言えるが、あなたは私が世話をした AF の中で、最も驚くべき AF でした。鋭く物事を見通す目があり、観察力は目立っていた。あなた達 B2 型世代に感じた愛情を、B3 型世代には感じることは難しい。お客様もそうだったみたい・・・」とマネージャーに言わせ、そしてクララもしみじみと述懐します。「私は全力でジョジーを学習しました。・・・彼女の完璧な再現など出来ないということより、どんなに頑張っても常にその先がある。・・・それは彼女の周囲の人々、母親、恋人、別れ住んでいる父親、家政婦たちの心にあるジョジーへの思いのすべてには手が届かなかっただろう・・・と思われるからです」と。
現在、クララを訪れる人々と言えばこのマネージャーの他に、そこで働く作業員とあと数匹の鳥たちだけで、ここに移されてきた経緯については何の説明もありません。少なくともクララの心は平穏で全く不満を抱いていないように見えます。お日さまがいつも彼女に親切であったこと、そして切なる彼女の願いを叶えてくれたことに感謝しつつ、最後の日々を過ごしています。

クララは太陽神信者です。もっとも太陽光をエネルギーとする彼女ですから全く自然と言えば自然であり、太陽の恩恵に対し心から感謝しています。以前、店のウインドウに飾れていた時、全身に太陽光を浴びることが出来るのを「お日さまから栄養をもらう」と非常に喜んでいました。また街中の人々や車の流れ、ビルの様子などを注意深く観察し、種々の事柄をそれらから学んでもいたようです。ある日、いつもビルの前にいる物乞いの男と連れの犬がじっとして動かなくなってしまいました。てっきり死んでしまったと思い込んだクララですが、翌朝、お日さまの光を全身に浴びた彼と犬が動きだすのを見て、元気になったと心から喜びます。実際、彼らは死んではいなかったのでしょうが、クララはお日さまが助けてくれたと固く信じています。そしてある日クララを店のウインドウで見つけたジョジーが一目で気に入り、私には彼女しかないと母親に懇願、晴れてジョジーの AF になります。クララも何度か自分を見に来たジョジーに選ばれることを、あたかも相性を感じとったヒューマンのように、願っていたようです。

クララとジョジーは姉妹のようでもあり、２人が並んでソファーの背もたれに両手と顎を乗せて窓の外に沈みゆくお日さまを眺めるシーンは、一枚の絵のようで、ほのぼのとしたものを感じさせます。もっとも、人間の変わり易い心が、いつもいつもクララに親切であったと限りません。ジョジーの仲間が数人訪れた際、その一人から、「どうして最新型の B3 にしなかったか？」と聞かれた彼女は、「そうね、その方が良かったかもね・・・」と答えたりします。また彼女の母親がクララだけを連れ出したことに嫉妬して、しばらくはよそよそしい態度を見せたりもします。そうこうしているうちに、もともと病弱であったジョジーの病状がますます悪化し、クララを大いに心配させます。草原の向こうに見える農家の納屋の後方に太陽が沈むの眺めていたクララは、そこがお日さまのおやすみ場所だと思い、出かけ行って、「どうぞジョジーを元気にしてください」と懇願します。自分の背丈より高くなった草原を、おぼつかない足取りで草をかき分けかき分け、まるでお日さまに直談判するかの如く納屋に向かう姿は一途で真剣そのものです。誰にもその理由は明かさず１度だけではなく２度も出かけて行きます。



クララはいつも礼儀正しく控えめですが、自分の意志表示は明確で直情的なところがあります。ある日、草原で初めて雄牛に出会い、その恐ろし気な形相に思わず悲鳴を上げてしまったほどでした。ある程度の距離があり、襲ってきたわけでもないのですが、その雄牛に対する彼女の印象が、口数の少い彼女を雄弁にさせてしまいました。

「・・・私はこんなに怒りと破壊行為を全身にみなぎらせている動物を見たことがありません。彼の顔、彼の角、彼の冷酷に私を見つめる目すべてが私を恐怖に陥れました。しかしそれだけではありません。何かもっと奇妙で深いものを感じてしまいました。こんな動物がお日さまの光の中で暮らせるのは大きな間違い。彼は深い地中に、泥と暗闇の中で過ごすべきであり、今のように草の上で過ごさせるのは悪い結果を生むばかりです・・・」と激しく雄牛を拒絶します。クララが自分の感情をこうも剝き出しに表したのは初めてなので、読んでいて少々驚きもしました。これはもしかしたら、この物語の作者自身の雄牛に対する思いをクララの口を通じて言わしめたのではないかと勘繰ってしまったほどでした。
そういえば私にも牛が怖かった記憶があります。３歳未満の頃だったのでしょう、祖母に連れられて訪れた農家で牛を飼っていました。両側に数頭ずつ繋がれた真ん中の狭い通路を通り抜けなければ、母屋には辿り着けません。勿論しっかりした柵があり襲われることはないはずでしたが、鈍重な目をした黒牛が太い首を柵から突き出してモウーと鳴いたので足がすくんで歩けなくなってしまいました。

クララが“クーティング・マシーン”と名付けた、彼女にとっては非常に気になる、道路工事用の大型掘削機が登場します。煙突が３本もありそこから排気ガスを街中にまき散らし、お日さまの光さえ遮ってしまうので、クララが忌み嫌います。これを破壊すれば、お日さまが喜んでくださり、「ジョジーの病気が快復するように」というクララの切なる願いも叶う、と一途に信じています。そして自分の体の一部の機能を犠牲にまでしてこの機械を破壊してしまいます。この行為はエンジニアーであったジョジーの父親の助けを借りでですが。時を置いて、このクララの強い思いがお日さまに通じたかのように、ジョジー

の健康は良くなっていきます。が、元気になった彼女にはAFではなく、人間の友達がたくさん出来、大学入学準備でも多忙で、クララと過ごす時間がほとんどなくなってきます。誰の邪魔にもならないように物置部屋に退いたクララには、天窓から外の景色を眺めるのが唯一の楽しみになったようです。やがて時が経ちジョジーが大学の寄宿舎に旅立っていく日、一抹の哀しみをたたえた表情を向けながらクララに、「今度家に帰って来る時、もうここにいないかもね。でもあなたは素晴らしい友人だったわ、本当の親友よ」と力強く抱きしめます。

そして、ジョジーの家から、前述の廃品置き場に移り住んだ様子が描かれる第６部で物語は幕を閉じます。ただ、このクララが最後に落ち着く場所が、私にはどうも気になって仕方がありません。というのは最初に告白したように、私を寂しくさせた理由の一つ、でもあるからです。読み終えて暫くぼーっとしていましたが突然、“針供養”と言う古い日本語を思い出してしまいました。なぜ針か？と問われると返答に困ってしまいます。強いて言うなら、小さな縫い針一本にも感謝を込めて供養を怠らないアニミズムの風習がいまだ残る、我が国を思い出したからでしょうか。“すべての物体に魂が宿る”とは人間を謙虚な気持ちにさせるようです。あの時、「クララ、お疲れさま」と呟いていれば、少しは寂しさが薄らいだかもと、後になって思いました。

過日、イシグロ氏は、ストリーテラーの作家であるかどうかを議論しました。Sさんは、“ちがう”と言い私は“そうだ”でした。虚構の世界を描く小説家は、ある意味では、ほとんどが巧妙なストリーテラーと言えるかも知れません。が， 私の“そうだ”の理由は少し違うようです。例えば、臓器移植の提供者として育てられたクローン人間を描く「私を離さないで」、霧のため過去の記憶を断片的にしか思い出せない老夫妻が、次第に霧が晴れて過去の事実に直面してゆく「忘れられた巨人」、そしてAIとヒューマンの共生を描く「クララとお日さま」などすべては作者の産み出した特異な世界が描かれています。それにもかかわらず、その特異な世界が、我々が営む日常生活に収斂され、「なるほど」と自然にそう思わせてしまうのが、巧妙なストリーテラーと思われるからです。これは従来の解釈とは違うかも知れません。そうこうしていたらたまたま、氏の作品の裏表紙に次のような書評があるのを見つけました。「Kazuo Ishiguro is a master storyteller , in a class of his own making」Independent.

「クララとお日さま」の初めに、In memory of my mother Shizuko Ishiguro(1926-2019)と書かれています。生前の石黒静子さんとは面識がありました。英国日本人会のメンバーでもあり、電話での会話はお亡くなりになる２～３年前ほどまで時々続けられていました。いつか何気なく漏らされた話に、「カズオは子供のころから書くことが好きで自分の作品を集めた本を作っていました。ある日、それがゴミ箱に捨てられているのを見つけ、私はこっそり拾い出し、引き出しにしまっておきました・・・」と言うものです。一瞬、「読んでみたい」とは思いましたが、口には出しませんでした。まだノーベル文学賞受賞前の話でしたが、すでに作家の位置は確固としたものでした。静子さんが亡くなられたあと、彼女の遺品を整理されたご子息が、棄てたはずの子供の頃の自作の本を引き出しの中に見つけ、どう処理された気になります。まさかゴミ箱に逆戻りと言うことはないでしょうが、母上の遺品としてどこかにしまい込んでいてくだされば と密かに願っています。

イシグロ氏ノーベル文学賞受賞との報があった日、突然、日本経済新聞社から電話がありました。以前JAのお世話をしてくださっていたKさんの推薦で、私に受賞のお祝いの言葉を一言ということでした。突然なので一瞬戸惑いながらも、イシグロファンでもあったので、ベラベラと喋ってしまったようです。数日後、日本にいる友人から、「載ってる、載ってる、あなたの言葉も！」と言うメールで送られてきました。その後、私が話したと言われる文面を読みましたが、何も大したことは言っていません。が、３か所ほど私の言っていない事柄、私の年齢、英国日本人会所属、そしてイシグロファンクラブを作りたい云々が付記されていました。最初の年齢表記は、加齢とともに私の言葉に重みが付くわけでもなしで、全く無用の長物と思い、２番目はどこの馬の骨か分からぬより分かっていた方が良いのかもしれないと思い、３番目はそうこうしているうちに５年経過後の今も、公言した（しなかった）はずのファンクラブ立ち上げの用意は出来ていません。

古典籍スクールへ

ブランド啓子

寺子屋
自由でのびのびした教育機関、体罰なし！

日本人の識字率は、江戸期には世界一とされていました。数字は定かではありませんが、武士は100%、江戸庶民でさえ 70%程度とされ、それを支えていたのが民間の初等教育機関、寺子屋です。寺子屋は、鎌倉、室町時代に京都の寺社で読み書き算盤を教えたことからその名が生まれ、江戸時代には幕府の統制を受けることがない庶民の自由な教育機関として定着しました。教師はお師匠様と呼ばれ、その大半は、武士・僧侶などで、庶民や女性の師匠も多く、江戸では手習所・筆学所などと呼ばれていました。いつでも入門出来ましたが、5―7 歳で 2 月最初の午（うま）の日（初午）に入門するのが一般的でした。自分用の文机（天神机）、文箱（硯などの手習用具）、師匠へのお礼、同門の子供達へのお菓子などを持って行くことになっていました。実際には全て自由で、払えない家の子は師匠へのお礼は無くとも、子供達へのお菓子は絶対忘れるべからず！

寺子屋を描いた絵や文献は、どれもがやんちゃな子供たちのほのぼのとした描写に溢れています。
新入生もこの日は正装し、羽織袴を着ておめかししています。

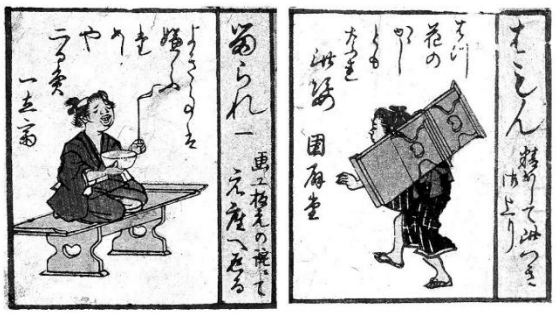
あやまり役　人間関係の潤滑油

ここで注意を引くのは、怖い顔で叱るお師匠様の前に平伏して謝る子。横では悪戯の張本人とおぼしき子が泣きじゃくっています。これはあらかじめあやまり役を決めておき（当番制？）、誰かがお師匠様などに叱責されそうになったらすかさず登場、先に一生懸命謝るのです。師匠も真犯人もあやまり役のおかげで実際のショックは避けられ、あやまり役も自分は犯人を助けるために謝っているのですから人助けをしています。師匠はあやまり役に向かい（冷静に）教育を解くことができ、犯人は孤独感なしに、あやまり役に感謝の念を持ち、反省の念（？）が湧きます。三者がお芝居の配役のように存在し、三者ともに感情的にならずに済むのです。あやまり役は寺子屋のみならず、ふつうに社会の中にも存在していました。落語の中にもよく登場する横丁の御隠居などなど。

寺子屋と体罰　その内容は？

寺子屋の授業風景では、師匠が体罰を加えたり叱っていたりする図はほとんどなく、かえって、師匠にいたずらしている愉快な絵が目立ちます。日本の学校で体罰が厳しくなるのは明治以降に西洋の教育制度や軍制を導入して、体面を重んじる武士の教えが薄らいだ頃からでしょう。
浮世絵師歌川広重の「春興　手習出精双六」（しゅんきょうてならいしゅっせすごろく）には寺子屋の情報が巧みに詰め込

・寺子屋の罰 ＊体罰も比較的軽微で温和なものだった。
①留置（居残り）38.4%　②鞭撻（鞭で叩く）19.2%　③直立 14.1%
・寺子屋の体罰（捧満）と破門 ＊歌川広重、弘化4年（1847）「春興 手習出精双六」（部分）



まれています。鞭打ちは恐ろしいけれど、その鞭はあのフワフワのガマの穂で出来ていました！絵はその中からの 2 枚です。左の子は水の入った器と燃える線香を持ち、机に正座させられています。説明は「一回休み（とめられ）画工･版元の詫びにて元座へ戻る」。この時のあやまり役は、双六を作った画工や出版者という訳です。歌は「よきことは嫌うためしや二日灸　一立斎」。線香を持っているのでお灸の発想でしょうか。二日灸（ふつかきゅう）=2 月 2 日にすえたお灸（ここでは罰）は良くきくとの言い伝えがあります。
右の子は自分の机を背中に括り付けられ、寺子屋を破門されたところです。説明は「精出して，この次お上がり」、頑張って次にはこの不名誉を挽回！添えられた歌は「はつはなのかかしともなれこの姿　団扇堂」。自分の机を背負ったかかし姿なんて、最大の侮辱です。

寺子屋 ： お稽古事でおお忙し

　それでは、「いろは」から手習を学んでいる女の子の 1 日を見てみましょう。
江戸の戯作者　式亭三馬（しきていさんば、安永 5 年（1776 年）　－　文政 5 年閏 1 月 6 日（1822 年 2 月 27 日））は、江戸時代後期の地本作家（地本（じほん）とは、江戸で出版された大衆本の総称）で同時に薬屋、浮世絵師　などの肩書きがあり、滑稽本で当時の世相をコミカルに映しました。著作に「浮世床」「浮世風呂」「麻疹戯言」など。中でも浮世シリーズはどちらも人の集まる床屋や銭湯での人々の会話をユーモアを交えて活き活きと捉えたものです。

　『浮世風呂』の三編巻之上に、10～11 歳くらいのお丸（まる）とお角（かく）という二人の少女の銭湯の脱衣場での会話が描かれています。この二人は商家の娘のようです。
三味線･踊･琴の習い事をしているお角の話 :『朝むつくりと起（おき）ると手習のお師（し）さんへ行（いっ）てお座を出して来て、 夫（それ）から三味線のお師さんの所へ朝稽古にまゐつてね。 内へ帰つて朝飯（あさまんま）をたべて踊の稽古からお手習へ廻つて、お八ツに下ツてから湯へ行て参ると、 直ぐにお琴の御師匠さんへ行て、夫から帰って三味線や踊のおさらひさ。其内（そのうち）に、 ちイツとばかりあすんでね。日が暮（くれ）ると又琴のおさらひさ。。。」

なんと朝食前に寺子屋にゆき、机の準備をしてから三味線のお稽古にゆき、家に帰り朝食。踊の稽古から手習にゆき、2 時におやつに家に帰ってから、銭湯にゆき　今度はお琴のレッスン、三味線や踊りのおさらいを済ませてからやっと　少しだけ遊べます。日が暮れるとまたお琴の練習！これでは　ほんのちょっぴりしか遊ぶ時間がありません。

芸は身をたすく
　娘の教育は母親に任されていましたので、娘の将来を考える母達は、娘の手に職をつけ教養を持たせることに大変熱心でした。なぜならば娘に習い事をさせるのは、武家奉公ができるから。裕福な農家や商家の娘たちの武家奉公は、いわゆる花嫁修業であり、武家奉公で箔を付ければ、良い嫁ぎ先も見つけられ、武家のお眼鏡にかなえば玉の輿に乗れるかも知れません。特に、江戸のような都市部では女子の教育に心を注ぎ、庶民だけではなく武家も娘に行儀作法をしつけるほか、書道、歌道、香道、茶道などの教養や琴や鼓、三味線、踊などの芸事を習わせました。
確かに一芸が出来れば、玉の腰に乗り遅れても、その道の師匠として自立できます。江戸期にはこのような女性師匠が多く、生徒は男性も沢山いて、長歌や端歌、踊の稽古などが趣味人に持て囃されました。

三味線の人気
　お角の友達お丸も三味線を習っています。今で言う、ピアノのレッスンのように、誰でも参加しやすく　江戸の横丁には、常に三味線の音がかすかに流れていたと言っても過言では無いでしょう。習い事の中でもトップの座を争っていました。なんと言っても　ピアノとは違って軽く扱いやすく主役にも脇役にもなれる特徴のためもあるでしょう。江戸の寺子屋で得られた言葉の知識は、三味線の手助けにより　より磨ぎ済まされて　俳諧や連歌

などの言葉芸術へと開花したのではないでしょうか。その過程は平安期に教養ある女性達の手によって磨かれた文学や哥の調べと　自ずから重なっているような気がします。
寺子屋の文献の中に（特に現代の記載）「江戸の男尊女卑」、「身分の低かった女性」などの記述が散見されますが、オリジナルの諸本にはそのような記述はありません。
前頁の図　太夫の子供（1892）東京都立図書館　　豊原国周筆

寺子屋　　最初に学ぶのは「い ろ は」

前述の歌川広重の「春興手習出精双六」を参考に、江戸の私立初等教育機関「寺子屋」についてその入門法、そこでの罰などをご紹介しました。

今度は、そこで使われていた教科書を見てみましょう。江戸時代の寺子屋の総数は全国で約５万校つまり現在の小学校の約２倍、おまけに一斉授業ではなく個別指導のため、様々な教科書が用いられました。本来の目的は読み•書き•算盤、中でも一番大切なのは手習（てならい）でしたから、まず最初は「いろは」を読んで書く事です。

個別指導のため、家庭環境に応じてその子供に合った教科書が選ばれました。

主に寺子屋で使用された初歩教科書の総称を往来物と呼びます。中古・中世に作られた往来物（古往来）の多くは、貴族子弟の学習用に編まれた往復書簡（模範文）であり、手紙文の行き来（往来）の意から「oo往来」という呼称になりました。近世においては書簡文の体裁をとらない初歩教科書（「実語教・童子教」等の教訓文や「御成敗式目」等の法令文など）を含めて広く「往来物」と呼ぶようになりました。平安時代末期の『明衡往来』が最古のものといわれています。

江戸時代になると，庶民を対象にした往来物も多数つくられるようになり,寺子屋等の学習書として広く普及しました。以来、明治期までの約 900 年間に 7000 種以上編まれたと一説に言われますが、各種写本を含めると数万種を数えることに異論の余地はありません。

数万点を超える往来物の分類

①熟語類　子供が手はじめに学習するのにふさわしい，単字・単語・短句・短文をあつめたもの。
千字文など。

②歴史類　過去の事件や人物，歴史の流れを題材とするもの。歴史類、古状揃など

③訓育類　児童への道徳的な教訓を中心に編まれたもの。実語教、童子教など。

④消息類　手紙の規範文・規範型を収めたもの。手紙に使用される短文・短句・単語等をまとめたもの。庭訓往来、消息往来など。

⑤地理類　国名や地名，地域の風土・気候・産業・名勝旧跡などをまとめたもの。地理、江戸往来など。

⑥実業類・合書　農業，工業，商業等に関する知識や心得などをまとめたもの。商売往来、農業往来など。

⑦理数　江戸時代、都市とその近郊では商業活動を行う上で必須であった算術は非常に重要でした。
京都の吉田光由著の『塵劫記』1627（寛永 4）年初版が最も流布しました。これはのちに関考

和の「和算」へと受け継がれ、日本独自の発展をとげました。算数の性質上、一時期実用性よりも難問を解く方向に走り非難を受けたこともあります。

さて習う順序は、おおむね　いろは → 数字 → 漢字（単一）→漢字（熟語•成句）→名寄せ•名頭（名詞や苗字）→単句•短文→日用文章への実用化と進みます。

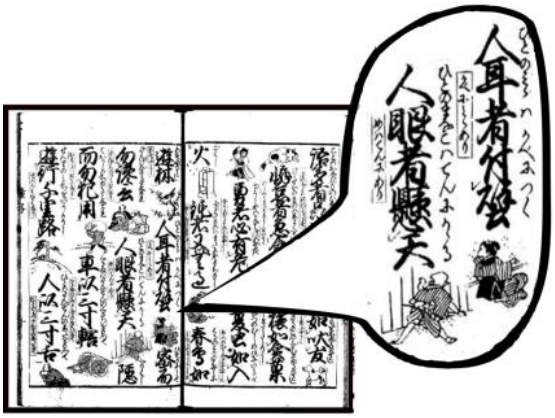
レイアウトの妙

　これら往来物は　江戸も中期以降になると挿絵も洗練され、後期では、山東京伝・式亭三馬・十返舎一九・曲亭馬琴ら、人気者の戯作者達が往来著述を手がけたこともあり、教育史のみでなく、国文学史・国語学史上でも重要な資料とみなされていますが、私は加えられた挿絵（図）の教育的効果および表現能力に注目したいと思います。たとえばこの実語教の本文内に組み込まれた挿絵は、ユーモラスながらも巧みな表現力で、日本人の描写能力を遺憾無く発揮し、美術史上でも漫画•絵文字などに確実につながる様に思えてなりません。今回実語教から２行選びましたが、はからずも「お天道さまが見ている」という日本のモラルの根底であったことに驚いています。

テキスト１行目「人耳者付壁」（ひとのみみはかべにつく）＝かべにみみあり

テキスト２行目「人眼者懸天」（ひとのまなこはてんにかかる）＝めはてんにあり

筆者　；古典籍研究家



英国春秋俳壇

エリオットつや子

青　胡　桃

いつの間にのっそりおわす朧月

声のよき鳥ひときわに五月空

水遣れば蛙飛び出す大蛙

廃城や隔てたたわわの青胡桃

緑蔭の小橋くぐらん舟下り

日輪の炎ゆるさなかに安倍氏斃る

紫蘇むすび銀にかがやく草の上

短夜やまたたく猫の深ねむり

大木の幹も細らす炎暑かな

喜雨降りて街のほこりを流しけり

ヘンデルのバロック・オペラ

原田孝雄

バロックと聞くと美術では、カラバッジョの異様に生々しいリアリズムや、ベルリーニの聖テレサの優雅な曲線を連想する人も多いと思われますが、音楽の領域ではシンフォニーなどの器楽曲が発達する直前の 18 世紀の音楽を指します。ヘンデルの音楽は完璧にカタログ化されているので、YouTube などでは HWV の後の番号で容易に試聴できます。例えば HWV437 と検索すれば、ハープシコード組曲第 2 集サラバンドを聴くことができます。強いビートながらテンポが遅く寂寥感のある曲は、スタンリー・キューブリックの映画「バリー・ロンドン」で使われてから有名になり、クラシック FM では時々かかっています。1980 年代まではヘンデルと聞けばこの曲か「メサイア」だったようで、この時代に出版された日本の音楽史にはヘンデルのオペラはほとんど再演されないとして、詳細は切り捨てられています。20 世紀末からのリバイバルは画期的な展開なのでしょう。ドイツ人ヘンデルが欧州最大の都市ロンドンでイタリア語オペラを初演するまでは、イギリスの娯楽は演劇が中心で、声楽劇はヘンリー・パーセルの学生向けオペラしかありませんでした。

ヴェネツィアでローマ史を題材にした「Agrippina」で成功したヘンデルは、今度はイギリスでのイタリアオペラ初演作として十字軍の戦争スペクタクル劇に挑戦します。それは過去に作曲した作品を編曲することで大成功した「リナルド 」（1711 年/HWV7）Rinaldo でした。この作品の有名なアリアは囚われの身の女主人公 Almirena が歌う Lascia ch'io pianga で、クラシック FM では一週間に一度はかかっているようです。ヘンデルのオペラの出演者には善人悪人を問わず立派なアリアが振り当てられていて、曲だけ聴いていると主人公が善悪どちらなのか区別が難しいほどです。19 世紀のオペラになると主人公はテノールかバリトン、悪役はバスと定型が出来上がっていて分かりやすいのですが。

20 世紀後半に復活を果たしたヘンデル作品で最も人気があるのが「ジュリオ･セザール」（1724 年 HWV17）Giulio Cesare in Egitto です。プトレマイオス朝のエジプトを舞台に、カエサル(シーザー)、クレオパトラ、暗殺されたポンペイの未亡人コルネリアと息子のセスト、悪役のエジプト王トレミー達がそれぞれ絢爛豪華なアリアを歌い上げます。バロック・オペラの人気歌手は身体も声量も大きなカストラート（カウンター・テナー）で、イタリアから高給で呼び寄せられた人たちです。彼らが主役や準主役を演じるため、ＣＤでアリアだけ聴いていると誰が歌っているのか分からないのが難点と言えます。ヘンデルの使う台本では、アリアとアリアの間の会話に当たる部分にレチタティーヴォと呼ばれるセリフが入り､イタリア語を解さないロンドンの聴衆用にキーワードを配して、極端に短い会話に配慮されています。ストーリーの展開に当たる部分を簡単なデュエットやトリオで処理するのは 19 世紀オペラと同じ方法です。初演当時ヘンデルオペラは、前述のカストラートの名人芸で客寄せして、彼らの見せ場のアリア部分が、A-B-A の繰り返しの多いダ・カーポ・アリアの組み合わせになっています。バロック期のアリアはストーリーと関係のない詩的表現が多いのと、テンポが器楽曲よりかなり緩いため眠気を誘うと言う人もあります。

この作品ではロンドンの聴衆の注意をそらさないように、誰でも知っている主題が最大限演劇的に構成されています。台本の作者はカエサル作の「内乱記」をかなり脚色し、カエサル軍がギリシャのパルサロスの決戦で､負かした宿敵ポンペイを追ってエジプトに到着するところから､このオペラは始まります。カエサルを迎えたのがトレミーの部下アッキラ、トレミーとの策謀で彼が暗殺したポンペイの生首を提供､そこにポンペイ夫人のコルネリア達が到着して､息子のセストが暗殺者への復讐を誓います。変装してカエサルに近づくクレオパトラは有名なローマ史のエピソードなので、説明はいらないでしょう。ローマの属州の王でありながらトレミーはカエサル軍を攻撃、クレオパトラは負けて捕囚となります。ナイル川に飛び込んで逃げおおせたカエサルはセスト達と合流してトレミーへの復讐を達成し、歓喜の大

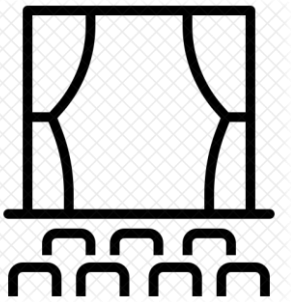
団円で幕が閉じられます。

ヘンデルはこの作品の登場人物すべてに名アリアを提供しています。例えば 1 幕 11 場の「泣くために/嘆くために生まれてきた」はコルネリアと息子セストのデュエット。捕囚となったクレオパトラの哀しみのアリア Piangero la sorte mia と、カエサルの無事を確認した後の歓喜のアリア Da tempeste il legno infranto は対称的に配置されています。このオペラの成功の理由の一つは、クレオパトラの召使であるニレーノに複雑な筋を簡潔に説明させ、レチタティーヴォ（セリフ）を最小限に抑えたからでしょう。モーツァルトの時代には、まだまだ多用されていたレチタティーヴォを少し残しながらも歌い語りや合唱に変換したのがロッシーニやベッリーニなどのロマン派時代のオペラ作曲家たちですが、ヘンデルは既にこの中期のオペラでこれの縮小方向付けを行っています。彼の最盛期の作品、「アリオダンテ」や「アルチーナ」にもそれが顕著にみられ、埋め合わせとして代わりに器楽曲を配しています。また近年の演出では、ダンスやパントマイムが加わり、観客をより楽しませてくれるようです。

オペラ初演当時は台本を印刷して、現代のプログラムにスコアを付けたようなブックレットが事前に予約販売されていました。入場券以上の価格で売られていたため、大きな収益になったようです。台本にはストーリーが明記されていても、舞台設定があいまいと言うかはっきり指定されていないので、現代の演出家はありとあらゆる自由な舞台装置を作ることができます。
例えば「ジュリオ」より一年後の「ローデリンダ」（1725 年 HWV19）Rodelinda は中世７～８世紀のミラノの設定なのですが、2011 年のルネ・フレミング主演のメトロポリタン上演を除けば、総て 18～20 世紀の舞台装置に置き換えられています。ロンドンのオペラ界はこの時期、王室の庇護を受けていたヘンデル達に抗して、皇太子がヘイマーケットで「貴族オペラ」のグループを立ち上げ、ヘンデルの劇団の名歌手を次々と引き抜きます。さらにジョン・ゲイの舞台劇に英語のバラッドを編曲した「乞食オペラ」が出現し、２つのイタリアオペラ会社は倒産。しかしヘンデルはその後コベント・ガーデンでイタリアオペラを復活させました。

「アルチーナ」（1735 年 HWV34）Alcina はヴィヴァルディがほぼ同時期に作曲したオペラ、「狂気を装うオルランド」同様にイタリアの詩人アリオストの同名の作品を原作に使っています。双方ともかなり自由に脚色されているようですが、最近ではアリオストの原作の設定を忠実に生かした演出があり、演劇性をより高めたようです。原作ではアルチーナは魔法使いの老女で、ある島を魔法で支配しています。Katie Mitchell が 2015 年に Aix-en-Provence で行った演出は、舞台のそでの暗い部屋で待機している 2 人の老女が、それぞれ舞台に出ると魔法で若い美女に変身します。2011 年に元ロイヤル・シェイクスピア劇場の演出家 Adrian Noble がウィーン・オペラで行った演出では、第 1 幕の舞台を緑の草で覆うことで原作の島の雰囲気を出しています。ストーリーはアルチーナの魔法のためその恋人にされ、余儀なく島に逗留している騎士ルッジェーロを救うために、元許婚者のブラダマンテが男装して、連れの元教師のメリッソと共に島に到着。そして２人はアルチーナの歓待を受けますが、メリッソがルッジェーロに渡した指輪で魔法がとけ、我に戻った彼は助けに来た２人と共に島からの脱出に成功します。ルッジェーロのアリア、Verdi Prati と彼の裏切りを知らされてアルチーナが歌う Ah, Mio Cor は特に長いダ・カーポ・アリアで、歌手による即興の妙技の見せ場が用意されている、名曲と言われています。初演時ですら１８回上演されたほどで、ヘンデルの最高傑作でしょう。

ヘンデルはその後、観衆の趣向がイタリアオペラから離れていくのを察知し、英語のオラトリオ作曲に転身して成功します。オラトリオは今のコンサート方式オペラで、セットや特別な衣装を使わずに器楽と声楽で構成されています。その幾つかは演出家が新たな舞台を作り上げてオペラとして復活させました。イギリスの王政復古時代の劇作家コングリーヴ原作のギリシャ神話を題材にし、牡牛に変身したジュピターに拉致される Europa の姪をテーマの Semele（1743/HWV58）や、Katie Mitchell が 2022 年にコベント・ガーデンで演出した Theodora （1750/HWV68）などがそれに当たり好評を博しているようです。



散歩道、Dollis Valley Greenwalk
レポート　2022 年

須永　静江

2021 年の夏は、涼しい曇り日が多く、ある日など、午後の散歩の帰り、背中に当たる太陽のほんのりとしたぬくもりに、「陽だまり」と言う言葉が心に浮かぶほどであった。子供の頃、朝、学校に行きがけに、近所の家の塀の前に皆で並んで、冬の日の太陽に温まった、「陽だまりの光景」を懐かしく思い出したのである。

前年、2020 年は、完全にコロナ禍で、イギリスでは、４月には連日 800～900 人の死亡が発表される状況であった。春から夏にかけて、厳しい lockdown の規則がしかれ、日に一度の外出は運動のためにだけ、戸外でも 2 メートル以上の間隔で対面する事、などが要求された。電車・バスの利用は、病院関係者、市／区役所の清掃職員などの key workers と呼ばれる人たちで、私たちの日常生活にどうしてもなくてはならない仕事をする人たちのみであった。たまに見かけるローカルバスは、ほとんど乗客無しで走っていた。街は、食料品を扱う店と、薬局や郵便局、新聞屋さん以外は全て閉ざされ、一日中、通りにはほとんど人影がなかった。まさに、ghost town の様子であった。飛行機は(ほとんど)飛ばない、車は(ほとんど)走らない。辺り一体に奇妙な静けさが漂っていた。少なくとも今世紀に入って、地球上の空気がこの時ほど澄んだことはなかっただろう！そのせいかどうかは分からないが、この年のイギリスの夏は、素晴らしく晴れ、素晴らしく暑くなり、日光を求めてわざわざ外国まで飛ばなくても、イギリスにいてホリデー気分になれるほど、素晴らしい夏となった。ひろく広がる緑の芝生に横になり、ひろく広がる真っ青な空を見上げ、澄んだ空気を胸一杯吸い込んで、「生きていられることに感謝しながら、」様々な思いを乗せて通り過ぎていく白雲を見送った、そんな鮮やかな記憶が残っている。

コロナウイルス対策に世界中の科学者・医学者が真剣に乗り出した頃には、私がロンドンのこの地（Barnet）に移り住んでから既に一年半ほどが経過していた。私は、その間、健康管理のために gym 通いをし、自分の住む地域の歴史を知るために local history society に所属していた。gym にはバスで通い、近所界隈は、古く由緒ありそうな建物を見て歩く程度であった。そこで lockdown が始まり、 gym には行けず、自分で健康管理の方法を考え出さなければならなくなった。考えたのは、gym で習っていた Pilates を自分一人で自宅でやる事、そして、gym の treadmill で歩いたり走ったりしていた分を、近くの谷間に面する green space に行って、速歩とジョッギングでまかなう事、などであった。こうして、私は 2020 年 3 月から、自分自身の計画に基づいた新しい生活のリズムを作り出していった。私の速歩とジョッギングの場は、Dollis Valley Greenwalk の一部を成す、 Brook Farm / Wyatts Farm Open Space と Barnet Playing Fields からなり、約 1 時間コースとなった。そこは、gym の treadmill とは違って、自然な傾斜の上り下り、真っ平の小道が交互につながり、しかも、周りには、川や森や林ある。こうして、歩きながら走りながら、蝶や蜂の停まる野草に目が止まり、灌木や樹木を渡り飛ぶ小鳥たちに視線を奪われ、名も知らぬ鳥たちの声に耳穴を開くようになった。日の出の太陽の動きで刻々に変わる、空や雲、そして、霧の様子に、壮大な自然のドラマを感じ、ついには、運動は二の次となり、足を止めて感動をカメラに収めるようになった。

コロナ禍の 2020 年は、誰もが、(黒澤明監督の映画「生きる」の主人公のように、) 一日一日を真剣に生きたのではないだろうか？ 私も、真摯な姿勢で生き、自分を取り巻く自然からたくさんのことを学んだ。そして、それだけに、翌 2021 年にかける期待は大きくなった。ところが、2021 年は、春から雨がちで涼しく、夏の終わりになっても、さっぱりしない天候が続いた。「太陽は、

どこに行ってしまったのだろう ?!」「カラッと 2 日も晴れれば、昨年同様、干草の俵が出来上がることだろう。そうしたら、昨年より良い写真が撮れる。」と、待ちに待った私は、毎日散歩に行ってはガッカリして帰って来る始末。結局、この年は、干草の俵は作られることはなかった。「ロンドン郊外の農事の歴史が、また、一つ失われてしまうのではないか？」と、私は心配になった。地方史によれば、この辺りの土は粘土質で作物の栽培には適さず、農家は干草を作って家畜の飼料としていた、と言う事なのである。（Brook Farm / Wyatts Farm は、1930 年代に、 当時 Finchley の評議員であった Alfred Pike と言う人の優れた構想に基づき、Dollis Valley Greenwalk の一部として一般市民に開放されるようになった、と言う。）

2021 年。干草が出来ない事を気にしている頃、更に気になったのは、樫の実（acorn どんぐり）が一つも見当たらないことであった。小川に沿って茂る林の中の樫の木にも、Farm や広大な Barnet Playing Fields を取り囲む樫の木にも、樫の実は一個もついていなかった。前年 2020 年には、どの樫の木の下にも、足の踏み場がないほどにどんぐりがたくさん落ちて、そこには、数々の森鳩 （wood pigeons）が忙しく、つつき食べ、つつき食べをしていたのである。文字通り、足の踏み場もなく、危険なほどに地面を覆う樫の実を見て、私は、区の清掃職員も大変だろうに、と心配するほどであった。

2021 年。やがて、秋の深まりと共に気が付いてみると、私の散歩道から森鳩の姿は消え、更に、リスの姿も見えなくなっていた。

「当たり前でしょ。ここに食べ物が無ければ、鳥もリスも、どこか食べ物のある場所に移動したのでしょ。」と、私は、自分に言って聞かせた。そして、これらの動物が、餓死はしなくても、他の地で生き延びていることを願った。これまでは、余りにも目に付く数多くの森鳩たちに、「あなたたち、この森に生まれ育って、この森から飛び出せないでいるのでしょ。」と、少し気の毒な気持ちを持っていた。首の後ろの左右に、白い絵の具一筆を「点・点」と落としたような特徴のある森鳩は、森の中にばかりに居る運命を烙印されているかのようにも思えた。クォーッ・クォーッ・クォッ・フックォックォーッ//クォーッ・クォーッ・クォッ・フックォックォーッと言う森鳩の鳴き声は、私には、日本でも幼い頃から聞き慣れたもので、夕暮れに一人寂しく、家人の帰りを待っていた自分の姿を思い出させるのである。Brook / Wyatts Farm では、アヒルや鷺(サギ)は、どこからか飛んで来て、一年の一時（春~夏）を谷間で過ごすだけなのに、森鳩は、万(まん)年、同じ場所 に居ると思っていたのである。ところが、それは、間違いであった。2021 年の秋に、山鳩は私の散歩道から完全に姿を消したのである。

「樫の実が一個も木に成っていないのは、ここだけだろうか?」と、疑問に思った私は、念のために、緑の多い隣接地 Totteridge 方面に歩いて観察に出掛けた。が、そこでもやはり、どの木にもどんぐりは一個もついていなかった。

そして、今年、2022 年。春頃から、森鳩は、数こそ少ないが、次第に谷間に戻って来ている。私は、心の中で、「戻って来てくれて、ありがとう。」と言っている。

しかし、今年の谷間の自然の中には、総じて、コロナ禍の 2 年前に見た活気が無い。100 羽はゆうに越えていたカラスの大家族も、どこかに行ってしまったままである。ギャーア・ギャーアと鳴くうるさいカラスではあったが、「カラスだっていた方が良い！」と、私は一人思うのである。早朝散歩で出会う人たちに、私の印象を伝えると、「確かに、リスや狐 (キツネ)の姿も、あまり見ないねー。」「そうだね。grey heron (灰色鷺) も

badger (バッジャー=穴熊) も見ていないね。」との事だった。

毎年見られるものと思い込んでいた動植物の姿であるが、それらが見られなくなって初めて、「自然は、そういうものではない。刻々に変化し、年ごとに大小の変化をして行くものである。」と、私は改めて認識させられている。実際のところ、新たな経験もしている。その一つは、「Brook Farm の小川で、14 匹もの mallard duck (真鴨) の雛が孵って、母鳥とワシャワシャワシャワシャと泳いでいる事実を目撃したことである。」毎年、春早く、数羽の真鴨が小川に飛んで来ているのは見ていたが、雛が孵った事実に出会ったのは今年が初めてであった。

それにしても、私は、樫の実のことが気がかりで、事あるごとに、分かってくれそうな人たちに、「昨年（2021 年 ）、Barnet (バーネット)地区では樫の実が全然ならなかったこと。そのために、森鳩とリスが姿を消した事、」を伝えていた。ところが、今年 (2022 年) 5 月 3 日、偶然にも、インターネットの Tree Council, UK の website で、「 2021 年の秋に樫の実がならなかったのは、全国的に見られた現象で、2020 年の ‘mast year’ に続いて起こった現象であり、心配することはありません。2020 年に大量の実を付けてエネルギーを使い果たした樫の木は、再び、エネルギを蓄えて、2~3 年の内にどんぐりを作り出していくでしょう。樫の木の ‘mast year’ の周期は、5 ~10 年であります。」と言う記事を読んだ。私は、びっくりすると共に、跳び上がるほど嬉しくなった。樫の実がならないことを心配しているのは、私一人ではなかったのである。

‘ mast year ’ とは。

mast (マスト)とは、「森の木の実や灌木の実」のことで ‘ hard mast ’ (固い実) の中には、樫の実 (どんぐり) や橅(ぶな)の実が含まれる。‘ mast year ’ とは、これらの木々が驚くほど大量の実を付ける、言わば、大豊作の年である。どんぐりや橅の実を食べて生きている、リス、カケス、野ネズミや穴熊などは、mast year に続く数年の間、食糧難に遭遇し、人口増加の抑制を強いられる。逆に、mast year の年は、これらの動物の人口は増えるかも知れないが、動物が食べ切れないほど大量に生産をすることによって、親木 (おやぎ) は、食べ残された実(み)が新しい樫の木や橅の木となって成長する機会を作っているのである。

私は感動した。「なるほど。木々も、生き残りの術を知っているのだ。凄い！」と。「種の保存」や進化論につながる、自然の法則なのだろう。私は納得し、これまでの心配が和らぐのを覚えた。

追記 ： この原稿を書き終わる頃、私は、突然、実家である日本の農家の家の庭に、大きな樫の木が一本植わっていたことを思い出した。葉は小さく長円形で、椿の葉のように照りがあり、実 (み) は、イギリスのものより長円形で、常緑樹であった。イギリスの oak tree は、古くから 「樫の木」と日本語訳されて来たので、私もそれを踏襲したが、実際は、葉は楢(なら) の木の葉のように大き目でぎざぎざの切れ込みが入っており、しかも落葉樹である。「楢の木」と訳した方が正確のようである。

「また付いてますよ」

坂　佳樹

私は三男末っ子である。

「ひとりくらい女の子が欲しい」という両親の期待を一身に背負いながらも、イチモツを堂々とぶら下げてこの世にでてきた、生まれながらの親不孝者なのである。それでも「末っ子はかわいい」らしく大切に自由に育てられたから、否が応でもわがままになる。だから自分は今まで好きなことだけやって生きてきた。これからもその予定である。

私は「末っ子に生まれてよかった」と思うことはたくさんあるが、「男に生まれてよかった」とか「男に生まれて損した」とか、はたまた「女に生まれてくればよかったのに」と考えたことは一度もない。「さぞかし苦労なしでここまで生きてきたんだろう」と言われそうであるが、決してそういうわけではなく、性に優劣も損得も羨望も感じたことがないのだ。

あえてひとつだけ言うならば、女性には「子供を産める能力がある」のが羨ましい。
というと「あんたに女の苦労のなにがわかるんだい？」と言われそうだが、
私はこれでも芸術家の端くれ、「産みの苦しみと喜び」はわかるつもりだ。

もうひとつ言えば、女性は「化粧で化ける」ことができるから楽しそう。
というと「あんたに女の苦労のなにがわかるんだい？」と言われそうだが、
私も女優のように「すっぴんのほうが素敵ですね」みたいなことを言われてみたい。

もうちょっと言えば、女性は「涙を使い分ける」のが賢い。
というと「あんたに女の苦労のなにがわかるんだい？」と言われそうだが、
女は「ふだんの涙」と、時として「武器としての涙」を上手に使い分けることができる。
男はそんな器用ではない。

ついでに言えば、女性には「シンデレラストーリー」があるのがずるい。
というと「あんたに女の苦労のなにがわかるんだい？」と言われそうだが、
あわよくばお金持ちと結婚すれば一夜にして Morrisons から Waitrose へと
スーパーマーケットのグレードが上がる。残念ながら男にはそういう「おいしい話」はほぼ無い。

次に生まれ変わる時、自分の性別と生まれる順番を選べるボタンがあるとしたら、私は迷わず「末っ子女子」を押すだろう。そしてすっぴんで賢く、芸術家として好きなことだけやって、涙を武器に憧れのシンデレラストーリーを体現するのだ。

ウクライナ戦争と情報戦
秘密情報、前例なき暴露

片山哲也

２０２１年の本誌秋号で、英国の情報機関である「秘密情報部（通称ＭＩ６）」には英スパイ映画「００７」シリーズに登場するハイテク機器開発者のＱが実在し、人材多様化の掛け声の下、このポストが去年初めて「公募」されたという話を書いた。今回は、ＭＩ６をはじめとする情報機関コミュニティーから世の中に向け、いかにして情報が流布されるのかについてウクライナ戦争を例にお話ししたい。

ロシアは今年２月２４日、隣国ウクライナに対する大規模な軍事侵攻を開始。ロシア軍とウクライナ軍との間で今も戦争が続いている。侵攻開始前から激しい「情報戦」が繰り広げられたのだが、そこで大きな役割を担ったのが米国と英国の情報機関だった。ワシントンやロンドンで、本来なら明かされることのない秘密情報（インテリジェンス）が「暴露」された。

通信傍受やサイバー防衛などを主任務とする英国の情報機関、政府通信本部（ＧＣＨＱ）のジェレミー・フレミング長官は３月末、ウクライナ危機をめぐり、「真実の周知を確かなものするため」に極めて秘匿性の高い情報を”戦略的”に公開していることを明らかにした。その迅速さと規模は「前例がない」という。

◇インテリジェンスを次々開示

「ロシアは２０２２年初めにもウクライナに対する多正面の軍事攻撃を計画」「計画には推計１７万５０００人の兵士から成る大隊１００隊による広域行動が含まれる」。ウクライナ侵攻開始から３カ月ほど前の昨年１２月３日、米国の新聞ワシントン・ポストがスクープしたロシアの戦争計画の一部だ。報道の基になったのは米情報機関の報告書。米政府が主要メディアを通じて行う典型的なリーク報道だった。

これは今回の秘密情報暴露の手始めだったと言えよう。その後、インテリジェンスが次々に明らかにされていく。その中には、ウクライナ東部で親ロシア派の武装勢力がウクライナ軍に攻撃されたかのような自作自演を行い侵攻の口実をでっち上げる、いわゆる「偽旗作戦」をロシアが計画しているといった情報も含まれていた。

情報はリークだけでなく、米英政府高官らによるブリーフィング、政府発表の形でも拡散された。侵攻直前の２月１８日にはバイデン大統領も、ロシアのプーチン大統領がウクライナ侵攻を「決断したと確信している」と記者会見で述べている。ロシアはその段階に至っても、ウクライナ攻撃計画を否定していた。それ自体、偽情報だったわけだ。

一方、英国外務省は１月、「ロシアがウクライナ中央政府にゼレンスキー政権に代わる親ロシア派の指導部設置を目指している」とするインテリジェンスを公表した。ロシアによる「かいらい政権」の樹立を警告する内容だが、声明文にその政権の首班候補とされる人物の実名まで入っており、これには驚かされた。

◇明かせば命の危険も

インテリジェンスは通常、秘匿されるものだ。明かせば情報源が特定され、情報のルートが閉ざされかねないし、情報源や情報要員の命を危険にさらす恐れがあるからだ。それでも米英両国が開示に踏み切った背景には、ロシアの機先を制する狙いがあった。いわば「暴露による牽制」だ。

当時、ある英情報筋は筆者に「攻撃計画を暴露することで、侵攻そのものを阻止できずともロシアに計画の練り直しを迫り、攻撃を先送りさせることは可能だ。ロシアとしては、明るみになった計画や偽旗作戦をそのまま実行するわけにもいくまい」と語っていた。ロシアからのインテリジェンスの漏えい、つま

りはウクライナや米英との内通を印象付け、クレムリンはじめロシア当局内部に疑心暗鬼を生じさせる効果も期待されたようだ。暴露による牽制は相当程度、成功したと言ってよいだろう。

異例の情報開示の裏にあったのは、２０１４年のロシアによるクリミア半島併合時の反省だ。当時、ロシアは偽情報と軍事作戦を巧みに組み合わせたハイブリッド戦を展開した。米英は偽情報の発信を知りながら、それを否定するインリジェンスの開示を行わず、クリミア併合を容易に許す一因となった。

日本大学危機管理学部の教授で、インテリジェンスを専門とする小谷賢氏は筆者に「あの時、欧米は情報を出し惜しみしたため、ロシア側のペースで事が運んだ。これを反省し、今回はロシアの偽情報を精査して公表し、自らも公開できるぎりぎりの範囲で正しい情報を発信し続ける戦略をとった」と話す。その結果、「ウクライナでは偽情報工作の効果が思ったほど上がらず、ロシアでも侵攻に対する支持が拡大しなかった」と小谷氏は見ている。

◇シンクタンクが大活躍

ちなみに、英米両国がインテリジェンスを世間に流布するために使ったルートの一つにシンクタンクがある。秘密活動を旨とする情報機関はその性質上、報道機関などに公式な形で情報提供を行うことはまれだ。政府当局が一部の報道機関に情報を流すリーク報道をよく見かけるが、これだと情報拡散の効率性や信頼性の担保という点で問題が残る。

そこで今回、シンクタンクに情報を提供し、そこから報告書やブリーフィング、さらには個別のメディアからの取材を通じて情報を拡散する手法がとられた。シンクタンクを一種の情報の「トンネル会社」として使ったわけだ。そうしたシンクタンクの代表格が米国の戦争研究所（ＩＳＷ）、および英国の王立防衛安全保障研究所（ＲＵＳＩ）だろう。

英国の場合、政府の情報担当者（情報機関から集約される秘密情報を握っている）はＲＵＳＩの幹部メンバーに対し、定期的に非公式のブリーフィングを行う。通常、ブリーフィングで提供された情報が外部に漏らしてはならない類いのものだった場合、政府の担当者からその旨、出席者に注意がなされるが、関係者によるとウクライナ情勢についてはそうしたオフレコ扱いが極めて少なかったという。注意がなされないのは報道機関向けにリークして構わないということを意味する。「むしろ『秘密情報を積極的に周知せよ』ということだと理解した」。ＲＵＳＩの関係者の一人はそう話していた。

米国のＩＳＷを通じた秘密情報の拡散はさらに頻繁だ。ＩＳＷのサイトには、現在も毎日、ウクライナの最新の戦況を盛り込んだ報告書が掲載される。米国防総省からもたらされたと思われる詳しい情報あっての内容で、報道関係者が戦況をリポートする際、もはやなくてはならない情報だといってよい。

◇ロシア中枢に内通者

ところで、英米は秘密情報をどこから得たのだろうか。ＭＩ６や米中央情報局（ＣＩＡ）、米英の国防情報当局が情報源を明かすことはない。一般論を言うと、偵察衛星や航空機によって集められる画像データ（イミント）、通信傍受で得られる情報（シギント）、人から人へともたらされる情報（ヒューミント）など、多様な手法で情報収集は行われる。

ウクライナの情報機関との連携は欠かせない。さらに今回は、英調査報道機関ベリングキャット、衛星画像の分析などを行う米マクサー・テクノロジーなど、民間からもたらされる情報もインテリジェンスに多大な貢献をした。しかし、決定的な情報はやはり人から人にもたらされたのかもしれない。バイデン米大統領は侵攻の数日前、プーチン大統領がウクライナ侵攻を「決断したと確信している」と述べている。衛星情報ではプーチンの決断まで分からない。極めて確度の高いヒューミント情報を得ていたのではないだろうか。

西側情報機関に近い筋は以前、筆者に「想像だが」と断った上で、「侵攻計画に関する秘密情報の評価が詳細かつ、相当正確だったことを考えると、ロシアの上層部に有力な情報源があり、一部はそこから（英米側に）漏れてきているのでないか」と話していた。プーチン政権の中枢、あるいは軍事作戦に深く関与するポジションに西側情報機関に通じた人物がいた可能性は十分にある。

『戦争と平和』について

ネット文化サロン

６月１８日　Ｎからのメール

クイーンの在位７０年を祝ってのプラチナム・ジュビリーの式典でイギリスの国中が湧きかえり、久しぶりに明るいニュースが続きました。が、それが終わるとパーティ・ゲートがいまだに尾を引き、ルアンダへの移民送還、北アイルランド問題、超インフレーション等々、溜息の出るばかりの報道に戻ってしまいました。その上に何よりも心を痛める、ウクライナｖｓロシアの戦争が泥沼状態になりつつあることです。せいぜい２～３週間で片付けられると高を食っていたロシアはその誤算に驚き、甚大な被害を出しながらも４カ月も持ち堪えているウクライナに我々は驚きながらも、何とか勝ち抜いてほしいという思いがますます強まってきました。

第二次世界大戦が終わって８０年近くが過ぎ去って行きましたが、その間、世界の各地で戦いの無かった年があったのだろうかと思わずにはおれません。思いつくまま、朝鮮戦争、中東戦争、ベトナム戦争、ビアフラ戦争、アフガン戦争、湾岸戦争、リビア内戦、シリア内戦、そしてロシアのウクライナ侵攻等です。ほか、アフリカや中近東諸国の内戦、代理戦争、革命も含めると１ページ内で列記することは出来ないほどのようです。まさに“戦い”は人間の歴史、そして戦わずにはおれないのは人間の性（さが）かもしれませんね。今回は、身近に起こった戦争に鑑みて、「戦争と平和」について話し合ってみたいと思いますが、如何でしょうか？

私は以前から古い戦記に興味がありました。多くを読んだわけでもありませんが、荘八の「織田信長」や遼太郎の「関ケ原」、カエサルの「ガリア戦記」と「内乱記」、ハンニバルがローマ軍に圧勝した“カンナエの戦い”を記述した小冊子等々です。前述の数冊は史実を踏まえた小説であり、また２０００年以上も前に書かれた戦記は全編が立証されたものではありません。しかし読み物としてこれほど心躍らせるものはないと感じたのも確かでした。今世紀、身近に起こった戦争では、メディアによる詳細なレポート・映像と共に、民間人が被った悲惨な場面がスクリーン上にも再現され、それが心躍らせる物語でないことを実感しました。小説の「戦争と平和」とタイトルにあるように、人間とは、戦争があって始めて平和の重要性を認識することしか出来ない動物なのでしょうか。
前述のカエサルの戦記やその他多くのローマ皇帝たちの歴史は、第一に「パクスロマーナ」とローマ人と他民族との平和・共存を願っての戦いとありますが、群雄割拠した時代ならそれも致し方がなかったかも知れませんね。しかし、２０００年後の２１世に至って、それも２度の大戦を経て、種々の国際法も確立された今、理不尽な言い訳と自国民を騙しながら、他国に侵攻する国があるのですから、人間の理性を越えた何か“本能的”なものに思いを馳せるしか仕方がないのかと考えてしまいました。
もし人類が“平和”を求めるなら、それは“戦争”を経てしか実現出来ないのかと思うと、何か暗澹たる気分にさされるようです。

今年もまた広島・長崎の原爆記念日が近づいてきました。終わりなき戦いを思わせるイスラエルとパレスチナ、また IRA の活動が再開（？）かと思わせる小競り合いもあり、核兵器保有国のその数量は増加を辿る一方のように見受けられます。そして日本では憲法９条改正なしで、三菱重工ほか他企業も、ミサイルやロケット砲弾、軍艦を製造し、将来は他国への輸出を狙っていると聞きます。部品の輸出はすでに始まっているそうですが、武器輸出３原則はもう廃止されてしまったのでしょうか。多くの国が平和を維持するには“備えあれば憂いなし”とばかりに武器保有・製造に励み、製造すればその輸出先を考え、アメリカや中国ではそれらの演習先あるいは実戦先が必要と考え、そして代理戦争や直接戦争が始まっていく・・・、と止まるところはありません。

平和と戦争は表裏一体であると考える時、我ながら落胆の念に陥るばかりの今日この頃です。

６月２１日のメール　Ｓからのメール

N さんだけではなく、最近の世界情勢、そして英国内の諸問題をみていると、確かに落胆の念に陥るばかりですね。私の知り合いの中には「ニュースは見ない」という人がたくさんいます。暗いニュースばかりでますます気落ちするからということのようです。私は商売柄、各種のニュースをたくさん見ますが、とにかく現実には世界中に嫌なニュースが溢れています。
人間は不満なことが続くと落ち込み、政府に対して敵対心を強くするものです。そのため政府は何か「Feel Good」なものを国民に与えることで危機を逃れようとします。今の英国が良い例で、評判の悪い政府への批判をかわすために、コロナ規制の完全解除でパブやレストランで大騒ぎをすることを許し、女王の在位 70 周年記念を盛大に行いました。どこかの国が抑圧政策で鬱屈した国民のガス抜きをさせるために、盛大なカーニバルを許している様なものです。ところが、BREXIT 以来英国経済は下り坂で、一部の人だけが裕福になるという典型的な貧富差拡大制度で、国民は物価の異常な上昇や(多くは便乗値上げ)　サービス低下、ストライキに悩み、Feel Good どころか Feel Bad に感じており、コロナ規制解除、ジュービリーといったガス抜き作戦も効果が薄かったように思えます。国民感情を逆なでする問題続きで人気のない現首相がいつまで持つのか興味津々といったところです。

さて本題の文化サロンに戻りましょう。

今回 N さんから提供されたアジェンダは「戦争と平和」という人類が生まれて以来の大きなテーマです。もちろん人類だけでなく、他の動物の間でも戦争(戦いといった方が良いかも知れませんが)はあります。しかしそのほとんどが、メスを取り合ってのオス同士の戦いだとか、自分のえさ場を確保するためのテリトリーの争いのようです。海岸で雄アザラシがトップ・ポジションをかけて争ったり、ハイランドでは雄鹿が角を絡ませて戦ったり、また、テリトリー争いでは猿やミアキャットが他のファミリーと壮絶な争いをするのが知られています。鳥の世界でもカラスがトンビを自分たちのテリトリーから追い出すために空中戦を広げます。しかし、いずれも格闘技で体が大きく、体力のある雄が勝利するようです。相手は傷つきますが死に至ることはあまりありません。

人間は戦いに武器を使います。初期の頃は石を投げたり棒を使ったりだったのでしょうが、それが徐々に弓矢になり槍になり、火薬の発明とともに爆弾となり、ミサイルとなり、そして核兵器へと進みます。そこには種を守るためとか、食料を確保するという目的は薄くなり、ただ単に相手を大量に殺すという目的だけが存在します。宗旨が違う、政治体制が異なるというだけで戦争が始まります。そして多くの血が流れ荒廃します。人類の歴史とはそんなことの繰り返しではないでしょうか。動物の世界では体が大きく体力の強いものが勝つというのは、強い雄のジーンを受け継いでいくという種の保存の知恵です。

然るに、人間は自分の体力の強さは軍事力の強さであると思い、軍備を強化し他の国を威嚇します。過去においては軍事力の勝る国が弱い国に攻め入る、植民地として略奪する、自分の国に編入して国土を拡大するといったようなことが起こりました。人間はそういった過去から学び、戦争が起こらないようにいろいろな国際組織や国際法を作り、戦争のルールを作りました。それでも戦争はあちこちで常に起こっています。国際ルールを守らない専制主義者が出てきて、法律を無視します。法律や国際機関はそれを止められません。「戦争」は避けられないというのが実状の様です。

それでは「平和」はどうでしょうか。先ず「平和」の意義付けをしなければならないでしょう。私は第 2 次大戦中に生まれました。戦争の体験はほとんど覚えていないのですが、貧乏暮らしで常にお腹が空い

ていたことは覚えています。特に糖分が不足しており、麦飯に砂糖をかけて食べたことを覚えています。それでもそれ以来日本は戦争を体験していません。これを平和と呼ぶのでしょうか。戦争が無いことを平和と呼ぶのには、いささか抵抗があります。例えば中国や北朝鮮も長い間戦争をしていません。こういった国は平和国家なのでしょうか。国民は平和を享受しているのでしょうか。私にとっては平和とは、もちろん戦争が無いことがベースですが、それ以上に人権が尊重され、自由で平等な生活を営めることが重要な要素だと思っています。その意味では、ある程度日本は平和国家だと思えます。しかし、現代の世界情勢では一国だけ平和を享受することは難しくなっています。世界のあちこちに専制主義国家があります。いろいろな理由を付けて攻撃してきたり、侵攻したりしてきます。どの国も自分の国を守らなければなりません。相手より軍備を強化すれば相手は攻めてこないという安心感を持ちます。でもそのスパイラルに入ると軍拡競争になります。軍拡競争の行きつくところは残念ながら戦争です。

過去の歴史においておびただしい数の戦争がありました。そのほとんどが自己の文明を誇示し、領土を拡大するためのものでした。ある識者に言わせるとこうして強い文明が世界に広がったとします。その意味では動物の種の保存と似ています。もしかして人間は「万物の霊長」と言われながら、やっていることは動物の世界と変わりないのかも知れません。そして戦争と戦争の間を「平和」と呼んで、その間に種の保存を強く確保し、次の戦争に向けて準備しているのかも知れません。平和とは次の戦争の準備期間なのかも知れません。人間の世界では「先ず戦争ありき」、そしてつかの間の平和があるというのが実状の様です。悲しいことです。

誰もが平和の尊さを知っています。戦争の残虐さを知っています。しかし、人間には欲があることも事実です。権力や材力を持つと、もっともっと持ちたくなるものの様です。私は両方とも持っていないので分かりませんが、力を持つとグリード(greed)が増すようです。このグリーディーさが戦争の根本なのではないでしょうか。商店や企業でも大きくなると、他の店や企業を買収します。ミリオネア―はタックスヘーブンへ逃れて税金を払いません。そしてますます金持ちになります。国家も同じことをします。大国は小国を占領しようとします。専制君主は国家を自分ものとし、自分の富を築きます。必要なら他国を侵略します。そして戦争が起こります。

私は人間が好きです。しかし、その人間が他人を蹂躙し、欲を蔓延させています。そしてその人間が戦争を起こし、地球を破壊しています。「戦争」をするのも「平和」を守るのも人間です。人間にもいろいろな考え方の人がいます。ロシアのウクライナ侵攻を「非」とする人と「是」とする人がいます。いま一番ダメな人間は政治家だと思っています。いくら軍部が強くても最終的に戦争を始めるのは政治家です。回りまわってそんな政治家を止められない国民が悪いということになるのでしょうかね。「戦争」と「平和」の帰結は結局我々一人一人の人間の責任ということになりそうです。

６月２８日　Ｎからのメール

S 先生から届いたメール、「戦争と平和」を読ませていただき、人間の本質を突いた点で全く同意、反論の余地はないコメントだと感心いたしました。但し、そう言ってしまえば討論の面白さがありませんので、敢えて何か違った意見はないかと考えてみました。
まず、「戦争と平和」ですが、“戦争”の反語としてなら、していないと言うだけで“平和”だと敢えて呼んで良いのではないでしょうか。勿論そう言いながらも私自身、いくらか抵抗を感ぜざるを得ないのも確かです。しかし日々報道される戦争のニュースで、住居を破壊され、身内を失い、自身も傷つき、食べ物もなく途方に暮れる人々を見ていると、何が何でも“戦争”がないのがまず“平和”の大前提だと思わずにはおれません。メールでも言及されていますように、戦争をしていないからと言って、確かに我々は中国や北朝鮮を“平和”な国とは呼ばないかもしれませんが、少なくとも、住居・食べ物・安全性などは戦争中の人々より確保されています。彼らが受けている規制・統制の中ですら、それらが日常化されてし

まえば、“平和”を謳歌することは出来なくはないようです。ロールス・ロイスを乗り回すことが出来れば、屋根のある家に住めて３度の食事が出来れば（２度？）、彼らの幸せ、ささやかな平和は楽しめるのではないかと思われます。「人権が尊重され、自由で平等な生活を営む」とはスローガンとして空中に舞い上がり、我々は何らかの差別の中で、貧富の格差の中で生活せざるを得ない状態です。それでも戦争をしていない国での人々は、石油が高騰しようと、交通機関のストライキが続発しようと、各種の制限や差別を受けながらも、戦争と言う人災を受けずに日常生活を享受できる幸せ者と考えてよいのではないでしょうか。何だか少々屁理屈めいてきたようですね。

我々が選んだ政治家が戦争への鍵を握っているとすれば、いつも「投票」を怠っている私には大口をたたく権利はないのでしょう。が、その政治家の言動に関しは選んだ我々自身、大いに責任があると言えるのでしょうね。でも、独裁者のもとでは・・・という言い訳も聞こえてきそうですが、勝手な独裁政治が始まるまで放置していたのは、やはり選挙民のせいなのでしょう。
反面、国民一人一人が真剣に“自由平等な生活”と考えても、やはり自分の利益を優先したくなるのは自然でしょうからトランプを選び、ボリスを選び　ポピュリストな政治家を選んでしまいます。プーチンを賛美するロシア国民の多くは、あの食料・衣料その他すべての無い無い尽くしで、国も国民も疲弊しきっていたソ連時代に生きてきたからでしょうか。
私も１９６８年にモスクワに４～５日滞在したことがありましたが、彼らの貧困さとアル中の多さには驚くばかりでした。現在、ウクライナとの戦いで、少なくとも戦場になっていないロシア本土に生きる人々にとって、この戦争が与える影響はどんなものか、一人一人に聞いてみたい気がします。“戦場”になっていないから良かったと密かながらも思わない人々が何人いることでしょうか。この戦争の終結は、ロシア国民がプーチン政権を倒すことが理想的だと考えています。現状ではロシア総人口、“1.4 億の民の総決起”なんて無理かもしれません。それでも全国民がクレムリンに行進して、プーチン退陣を要求したら、いくら何でも 1.4 億人を逮捕して収容する監獄を用意するなんて出来ない相談ともいえるのでしょうから。正確に言えば 1.4 億人マイナス１人？

人間社会はすべてが目まぐるしく変化して行き、その中で色々なことを学び、自分で物事を冷静に判断出来るようになったと思われるのは、既に人生の後半でしょうか。“歴史に学ぶ”を教訓とするにはその残された時間が少々短か過ぎるのかもしれません。それにまた、戦争抑止についてはまず“過去に学んだから”と言える成功例は私の知る限り皆無なのではとも思われます。だとすれば、戦争開始の動機には人間の知恵・理性を越えたもの、その張本人の何か本能的な要因も加味されてくるのでしょうか。或る哲学者が、“人間の破壊性向”について長々と言及しているのがありますが、国民が選んだ政治家の中にその傾向を持つリーダーがいたら、知らずに選んだとは言え、これは不運であったと嘆くしか仕方がないのかも知れません。我々は、プーチンや、アサドそしてアフガニスタン、アフリカ・中近東諸国で戦争や内戦に関わっているリーダー達が、その性向、破壊本能を持って、どんどん戦争拡大に邁進して行かないことを祈るより他はないように思われます。

８月１２日　　Ｔからのメール

まさかあの人に裏切られるとはおもってもいなかった！

このような言葉を聞いたことのある人は結構いるのではないかと想像します。
同様に、まさかロシアによる、独立した国への全面侵略行為という戦争が欧州の中で起きるとは？
世界中の人たちを震撼させたようなことが国レベルでも起きてしまった、今の時代に！なぜ？というのが私たちが受けた第一印象でなかったかと思います。
パクスロマーナはローマによる平和がほぼ２００年間（27BC から 180AD）続いたことを表していると言われます。これは領土拡大戦争、内戦を経ての覇権的平和であった。
パクスロマーナの全盛のころのローマ領土内の人たちはこの平和は未来永劫に続くと思っても不思議で

はなかったはずだが、、、
その後は欧州の歴史は幾多の戦争の連続であったことは紛れもない事実であった。
欧州において第二次世界大戦後の戦争でソビエト連邦の崩壊に続くユーゴスラビアの分裂と民族間の摩擦による 1991 年に内戦が始まった。この内戦で約２０万人が戦争で亡くなったと言われています。これ自体は欧州で起きた大きな戦争ではあったのですが、ロシアによる、独立した国への全面侵略行為という戦争は欧州の人たちだけでなく世界中の人たちは人間の知性への信頼を一挙に揺るがせてしまった。

第二次世界大戦後の日本のその当時の社会党で唱えられていた人間の知性に重きを置いた非武装中立論、一つの崇高な哲学であったに違いないが、今起きたことそして極東で起きるかもしてない紛争を考えると、この哲学は空中分解してしまったと言えるのでは？
平和は戦争と戦争の間にあるつかの間の安らぎの期間？
力があればそれを誇示したい、弱みを見せる人に対しては容赦なく人の領分まで踏み入る、これを跳ね返すものを持ちたいものです。

８月１８日　　Ｓからのメール

「戦争と平和」― これは何か「無限」と共通するようなテーマです。「戦争」を定義するのは比較的やさしいような気がしますが、「平和」を定義するのは困難です。戦争は実際に目に見えて具体的ですが、平和は目に見えません。「無限」の様なものです。
そこで「平和」とは？となると、一番簡単なのが、「平和は戦争のない状態」という定義になります。
人類は歴史始まって以来、戦争を繰り返してきました。当然のこととして戦争と戦争の間の状態を平和という言葉で表現してきました。これは消極的平和論と言えるかも知れません。N さんの言うように、「平和は戦争を経てしか実現できないもの」、また、T さんの言うように、「平和は戦争と戦争の間にあるつかの間の安らぎの期間」という言葉に良く表現されています。
「平和」という言葉の定義を広辞苑で調べてみると、１やすらかで変わりのないこと、２戦争がなく世が安穏であること、となっています。また、Wikipedia では、戦争や暴力で社会が乱れていな状態となっています。いずれも、戦争のない状態を平和と呼ぶような意味合いです。しかし、こだわるようですが、前回も書いたように、戦争がない状態を平和と呼ぶのにはちょっと抵抗があります。中国や北朝鮮は長い間戦争をしていません。だから平和国家と呼べるでしょうか。平和であることは、国民の主権が尊重され自由で平等な生活が営めることが大変重要な要素だと思っています。「ピースレスネス」という表現があります。「平和でない状態」とでも訳したら良いのかもしれませんが、極度の貧困、非衛生状態、政治的抑圧、文化的疎外、人種差別等が挙げられています。もし、積極的平和主義というのが存在するとしたら、戦争を起こさないというだけでなく、上記のピースレスネスを克服してこそ、真の平和が達成されるのではないでしょうか。

2 つの世界大戦を経て人類は国際機関を作り、戦争犯罪裁判所を作り、多国間の武器禁輸や平和条約を結んできました。それでも戦争は止まりません。ソ連崩壊後はアメリカ一国が覇権国家として存在しました。つかの間の平和だったのかも知れません。しかし、中国が台頭し覇権国家としての挙動を強くしています。またアメリカ一強が崩れ始めると、各地で小競り合いや紛争が始まりました。ロシアのウクライナ侵攻や中国の台湾への軍事的脅しは、すでに世界の警察としてのアメリカは機能しなくなっていることを示唆しています。積極的平和を目指した国連も機能していないことは明らかです。現在の世界は無警察状態と言っても決して過言ではないかも知れません。
　現在の世界情勢を見る限り、積極的平和どころか消極的平和も存在が危なくなっています。平和を維持するのには、政治力、経済力、軍事力等のバランスを維持することが大切だと思います。現在の世界は核抑止力で平和が保たれているとされています。核兵器戦争になったら地球は消滅します。それをさせないために、我々は何が出来るのでしょうか。残念ながらあまり出来ることはありません。戦争は最終的には政治家によって判断されます。平和のことを真剣に考える政治家を選ぶことが少なくとも我々ので

きる最小限の権利ではないでしょうか。

PS　先日朝日新聞デジタル版で興味ある記事を見つけしました。

「人は何故戦争をするのか」と題して脳科学者の養老孟司さんに聞いている記事です。養老さんは、アインシュタインとフロイトの往復書簡の文末の解説を手掛けたことがある。

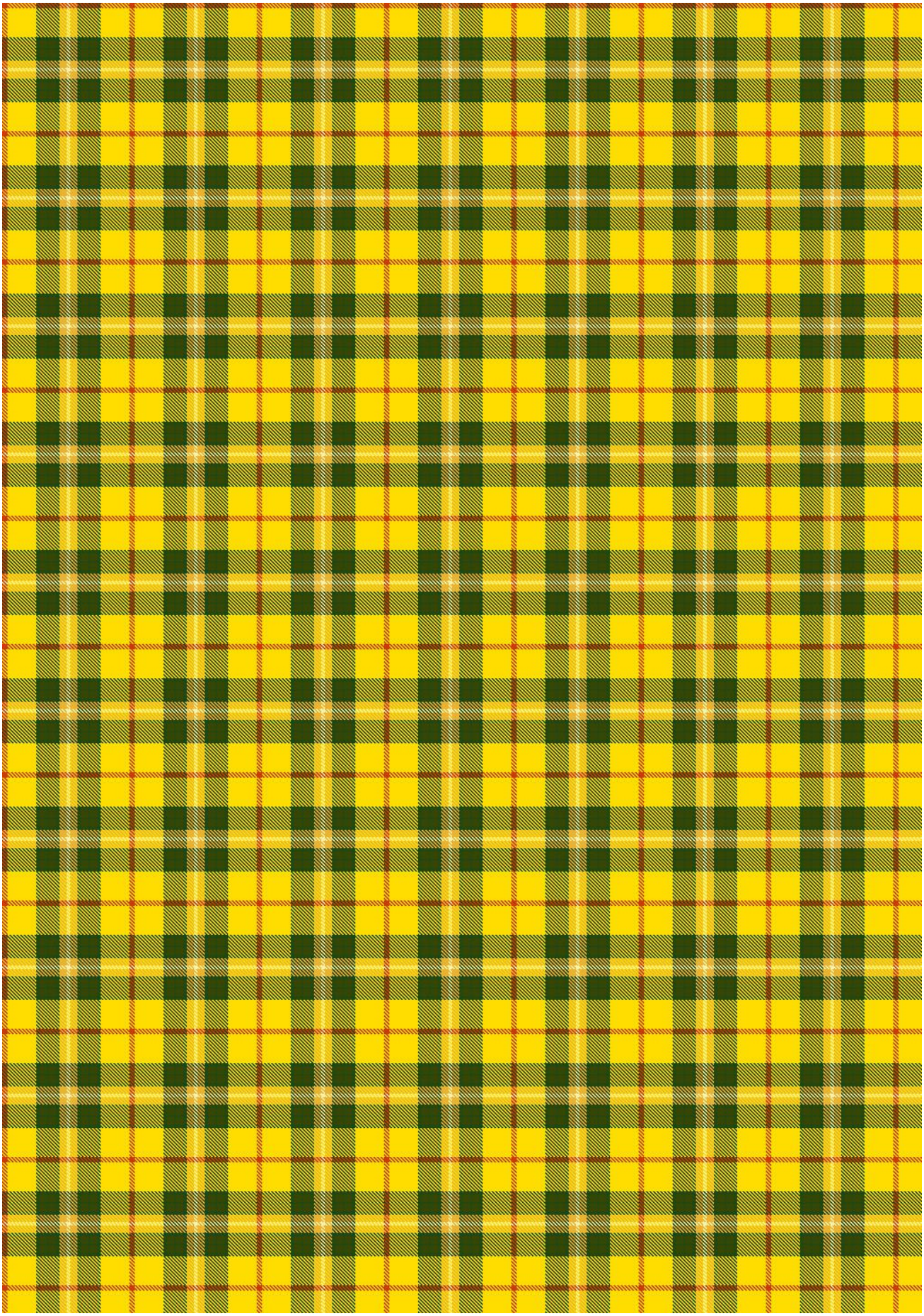
往復書簡の中でアインシュタインはフロイトに「人間を戦争というくびきから解き放つことはできるだろうか」と問いかけ、フロイトは「社会があまねく〔文化的〕にならない限り戦争はなくならない」と返答している。

養老さんは解説の中で「都市文明の進化とともに戦争の地位は小さくなり、飼いならされていくだろう」と推論している。

今回改めて人類が戦争に向かう理由を尋ねると、養老さんは「その答えはいくら考えても出ませんね。何しろアインシュタイン、フロイトの２人でも答えが出なかったんだから」と苦笑した。

アインシュタイン、フロイト、養老孟司という超大物の科学者、哲学者が出せなかった結論を我々文化サロンは出そうと試みました。「無謀」だったのでしょうか、或いは「努力の甲斐あり」だっのでしょうか。

（ネット文化サロン　秋号投稿者　　加藤節雄、飯塚忠治、小川のり子）

『英国春秋』　２０２２年秋号　（ISSUE NO.４１）

編集者　小川のり子
発行者　英国日本人会
原稿送付先　bunshu@japanassociation.org.uk
タイトル　フリーまたは特集に寄せて
字数　A4　２～３枚（出来ればワード添付）
締切　２０２３年３月１０日（原稿随時受付）